

今も猶高くそ仰く皇御孫のあもりましけむ高千穂のやま  
かつらきや一言ぬしのみをさきとなりてつかふる御代は動かし  
たな末にさゝけもたしゝ千引岩それもかひなくなりけるかな

壯行會に

大君のしこのみたてと君ゆかは羽うつわしを手とりにはせよ

輕氣球

久かたの天のやちまた眞帆あけてゆきかふ舟もあるよなりけり

鏡とき

明暮にみかくとすれとよの人の心やくもる鏡なるらむ

寄書祝

さくら木に匂ふ言葉の花の露たえぬも御代のめくみなりけり

矢澤依山の還曆に

かくて猶千よもへぬへし年ことに松のみとりの若かへりつゝ

山梨縣技師今井氏の母刀自の古稀の賀に

稀なりとむかしはいひし七十を君はちとせのはしめにはする

清水澤のまとゐにて煙を

木のめなる煙も清し清水澤心にこらぬ人やすむらむ

今年五月の廿九日に宮下ぬし事についてにとふらひ來

て時鳥はまた鳴かぬやととひけるにいまたなかすとい

ひて過ぎけるを三十一日の明かたに雨そほふるにほと

ときすのはしめてなきければ其の日宮下ぬしに事のつ

いてに文つかはすことありければ其のはしに

なきつやと尋ねし人につてよとて音つれそめぬ山ほとゝきす

窓芭蕉

窓のとしけるはせをのかけしけみかくれたりともみゆるやとかな

秋の屋集の二編成るへきよし平尾氏よりいひおこせけ

れはかねてかねことすとて文やるついでに

あやにしきはたはり廣きもみちはの秋の色こそ見まくほしけれ

明治三十七年

巖上松 御歌會始御題

さゝれ石の成れる巖に根をしめて榮ゆく松のちよやいくちよ



新年朝日

年なみの今朝たちかへる海の上へのほる初日のかけののときさ

河邊新年

年くれし里の中川たちかへりまたあらたまる波の音かな

新年霞

年とゞもにくる春にしもあらくにけしきはみてもたつ霞かな

新年書

かきかはすよことの文字のさまゞににほふも年のひかりなりけり

岩本尙賢翁より文のはしに七十になれる年のはしめに

とありて「老の波七瀬はこえぬ諏訪の湖のふかきめく

みを頼みわたりて」とありければ

老の波こゆる七瀬をはしめにて百八十瀬をも君はこえなむ

老の波百瀬もこえよ諏訪の湖のふかき恵のかきりなければ

澤若菜

ゆく水の鏡のかけも老いせぬは野澤のきしの若菜なりけり

山春雪

またき吹く梢の花とみよしのゝ山をにほはす春の沫ゆき

書齋春雪

文まなふ窓にひかりをさしそえて春さへ雪のふりやつもれる

雪中聞鶯

それそとも匂はぬ梅に鶯は雪の花笠きてそなくなる

寐覺鶯

夢さめてまたね催す曙をうつゝにかへす鶯の聲

園梅

ちるまでをなく鶯にかしてこそ園生の梅は見るへかりけれ

瓶中梅

折られつる心うれしと梅の花まとのをかめにゑみやこほるゝ

春色所々

よる波の花にさくらに海山のへたてもおかぬ春の色かな

春鳥

うらゝと霞む野山の百千鳥今は春へとなきかはすらむ

名所早鶯

萬葉集



さきにほふ梅津の春におくれしと初音をいそぐ鶯の聲

春雨静

つれ／＼のなくさめくさと文見ても眠りかちなる春雨の空

朝春駒

朝日影けふる濱野のはなれ駒霞かくれに聲いさむなり

毎春愛花

咲きて散るほとはいく日もあらなくにいつれの春か花にあくへき

川邊花

隅田川つゝみの櫻さきしよりさをのしつくも花の香そする

依花客來

いさとしもいはぬに人のとひくなり花やこゝろのつかひなるらむ

月前花

月影の何くもるらむさく花の雲より外の雲もなき夜に

東京の長善館なる久保源一よりこたひの恩賞(金牌)

ありしをいはひて文おこせられたる中に櫻の花二つ三

つ入れたりければめつらしくうれしきにおもひつゝけ

てよめる歌ともやかておくりやりつ

巻きこめし文の中なる花見れば花の都の春そゆかしき

林中花

おひしける松の林をわけゆけは風にかくれし花もありけり

曙山花

ほの／＼としらむ方より匂ふなり尾上にかゝる花のしら雲

花所々

かくて猶七日も経なん上野山隅田川原の花くらへして

花下忘歸

花の下に今宵はねなむ枕つくつまやのうちはさもあらはあれ

松間花

ときけなる松の緑にこきませて花の錦をおる人やたれ

朝花

朝日かけにほはさりせはさくら花かくまでよにはかをらさらまし

花前興

花の下にうたよみをれは鶯も蝶もまとゐの數に入りつゝ



堤上花

隅田川堤つたひに行く人の袖さへにほふ花さかりかな

花發風雨多

よの中はかくこそありけれさくら花雨と風とをあたものにして

月前落花

月影にちりゆく見れはさそはるゝ花は風にもかきらさりけり

春山

花鳥の色香なからにけふもまたあけぬくれぬとにほふ山のは

野外雉子

椿ちるこせの春野をすき行けは妻よふきゝすほろゝうつなり

曉天雲雀

あかときの鳥の八聲におくれしと芝生の床をたつ雲雀かな

荒屋燕

こほれても猶くるつはめかたふかね軒のむかしの春やこひしき

野遊絲

すみれつみつはなぬく野に少女子が袖ひくはかりあそふいとかな

瀧下藤

藤の花にほへる瀧の白糸も春はうへなき色にそみつゝ

朝更衣

白妙の衣にかへて朝宮をつかへまつれはすゝしくもあるか

杜新樹

ときぬと梢しみゝに若葉さしすゝしくもあるか衣手のもり

新竹露

うちなひく窓の若竹朝なゝ露にそなひく窓の若竹

曙卯花

卯の花の袖かき寒し麻衣きその寐覺のあけほのゝ空

山田早苗

手もすまにいそくとすれと小山田のそしろの早苗猶そのこれる

雨後早苗

早苗とる田子の袂は五月雨のはれて後にもかわかさりけり

山田早苗

賤の女かもすそぬらして梅雨のふるの山田に早苗とるなり



初開時鳥

都にもつてやゝらまし時鳥まち得てきゝしけふの初音を

雲外時鳥

ほとゝきすそれかあらぬか山のはにまよへる雲のよその一聲

五月のはしめつかた鴨綠江九連城わたりの皇軍あたと

もをうち拂ひつと承はりて

秋ならて紅葉の色になかるらむありなれ川の水の白波

皇軍のすゝむ旗手のおひ風にしこのしこ草なひきふしけり

橋時鳥

入りかゝる弓張月にほとゝきすやはきの橋を鳴きわたるなり

名所時鳥

大宮に聞えあけむとほとゝきす上野の杜を鳴きていつらむ

晩夏時鳥

なきふるす夏の日數のほとなしと聲もをしまぬ時鳥かな

池菖蒲

年ことにますたの池のあやめくさよはひ根なかきためしにそひく

初梅雨

鈴鹿河八十瀬の末やいかならむふる五月雨のけふをはしめに

五月雨欲晴

五月雨の雲間を見れば月影もけしきはかりはもらしそめけり

峯照射

ともす火により來る鹿のめにさへやあはてわかるゝ峰のよこ雲

江上夏月

夏の夜の月をすゝしみおほくらの入江こく間に明けわたりつゝ

磯夏月

くたけちるかけさへすゝし白波のあらいそさきの夏の夜の月

叢中螢

おのつから野となる庭の叢にひかりそへても飛ふ螢かな

罹麥露

おのかしゝにほへる庭のなてしこに露もあはれはかけておくらむ

愛罹麥

しはしたに見ねはいかにと朝夕に心おかるゝなてしこのはな



垣夕顔

夕かほの花はへたてもおかぬかなこほれそめたる賤か垣ねを

夏夜聞笛

夏の夜の月にしらふる笛の音を袂におくる風そすしき

雨後蟬

一しきり夕立過ぎし神なひの杜にしくる蟬のもろ聲

閨中扇

すてられむ秋をおもへはなかくに風さへねたし閨の月影

市納涼

水うちし夏の市路にけつり氷の音をきくさへすしかりけり

高櫻風涼

高きやにのほれはすし久かたの天の河原の風やかよへる

避暑旅行

あしの湖夏なき波にあめる身のいとまも御代のめくみなりけり

夏湖

夏なから身にしむものは諏訪の湖波間にふしの雪のあけほの

山早秋

この夕西ふきそめて峯こゆる風も秋めく音羽山かな

野徑尋虫

子の日せし松のゆかりのあとめてむしの音たとる野への細道

虫聲近枕

さよふけてふく風よわる手枕になきよるむしの聲あはれなり

田上秋風

千町田の稻葉の波をふきよせて秋風さへや穂にもいつらむ

浦秋風

よる波をきしの緑にかけそへて秋風さわく三保の浦松

田上鶉

ふく風に床もあれぬといめ人のふしみの田にうつらなくなり

水邊萩

秋といへは風ふきわたる川浪のよるさわくきしの萩原

朝露

露おもる朝の庭の八千くさをみたさぬほとにふく風もかな



引板

山田守る賤はいとまもなかるらむ引板のかけ繩引かぬ間そなき

關路鹿

逢坂の關ふき越ゆる秋風にたくへる鹿の聲そ身にしむ

鹿聲幽

なか／＼にほのかなるこそ悲しけれ山のあなたのさをしかの聲

月前松風

松風にあたりのちりを拂はせて月もうきよの外にすむらむ

禁中月

九重の御かきのうちやいかならむこゝにもすめる秋のよの月

月前秋興

糸竹をしらへかはして夜もすから月の遊びもあかぬ秋かな

舟中月

こきゆけと／＼はてなしいつてふねいつこか月のみなとなるらむ

井月

かくしつゝいくよくみてもすみわたる影はむかしのまゝの井の月

野月

夕嵐しをりし草に宿りけり菅のあら野の秋の夜の月

山家月

山里の柴のあみ戸もへたてぬやあまねき月の心なるらむ

故郷月

露深きいくその草の袖ならむ月さへぬるゝ小野の故郷

嶺上月

一つえものほらぬほとは嶺の月猶はなれえぬ心持こそすれ

閑居月

さやかなる月にむかへはおのつからよのうき雲もなくなりけり

水上月

水の上をかはらぬ庭としめおきてなかれもやらす月はすむらむ

松間月

物の音もそふ心持する山松の木の間をわたる月のさやけさ

會友見月

たまあへる友をつとへて月見ればまた一しほのかけそそひぬる



松上月

ひるの間は日影おほひし笠松のあたりさやかにてらす月かな

海邊霧

霧こさめて二見も見えす伊勢の海常世の浪の音斗りして

紅葉暎日

山姫の紅葉重ねの秋の袖いま一入と夕日さすなり

紅葉深

あかねさす夕日かよふ色見れば紅ふかし峯のみちは

水郷擣衣

よる波の音を交へて桂川月すむかたに衣うつなり

秋葉

えひかつら峯のさくとり／＼に色つきわたる秋となりけり

秋視聽

雁かねの聞ゆる空をなかわれは今こそ月もすみわたりけれ

故郷秋關

故郷の庭のをすゝき秋たけてたもとに匂ふ霜のはつ花

故郷露

あれにあられてふり行く里の秋とへはこたへぬ露そ袖にしくるゝ

古寺暮秋

山寺の秋のわかれの名こりさへつきぬとひく鐘の音かな

里初冬

誰か里もひまなくゆへるわらかきにおく霜見えて冬はきにけり

初冬山

常盤山松の梢をふく風も今朝はた寒し冬やきぬらむ

残紅葉

冬の来て色こそ増れ木枯の風をよ所なる庭のもみち葉

紅葉残枝

一葉たに残らしものとおもひしをさそひもはてぬ木からしの風

静處落葉

ことゝはぬ木のはは音もたゝせしと風ふかぬ間にちりて行くらむ

残菊久

翁さひいたく霜もしら菊の色香久しきませのうちかな



社頭霜

神垣におく霜白し朝宮をつかふる人の袖やさゆらむ

寒草帯霜

枯れのこる冬野の尾花風さえて夕霜まよふ袖の寒けさ

山路霜

柴人か片山路の霜はしらふみしたきゆく音の寒けさ

月前千鳥

こき出つる天の河原の月の船さきおふ千鳥聲さやかなり

浦千鳥

こと浦の波のしらへにあはせつゝゆきかへりてもなく千鳥かな

氷始結

小夜衣さえししるしを汲みおきしくりやの水に見する薄氷

寒松風

冬枯の野中にたてる一つ松霜ふきはらふ風の寒けさ

寒流月

早せ川氷らぬ波も氷るかと思ゆる霜夜の月の寒けさ

冬月

霜さゆる岡への松にかけふけて嵐も氷る冬の夜の月

寒夜網代

網代守る袂やいかによる波もこぼる夜床の風の寒さに

庭上初雪

もみしはのうつみし庭の苔藁また一重とや初雪のふる

雪中留客

降る雪を見つゝ語らむ君かのる駒さへまやにやとれるものを

冬旅

草枕旅の衣にさえぬなり雪ふりみてるこしの白山

冬香

ふりおける雪をにほはす梅か枝に春より先の鶯もかな

冬動物

山は皆たえて色なくなりしより兎も雪の衣きにけり

山家冬静

松の戸の雪にうもれし朝より風もさわかぬ山の下庵



夕鷹狩

暮れそめてあらし身にしむ御狩野に今一よりと聲あはすらむ

峯椎柴

ふる雪とゝもに月日はつもれとも色はかはらぬ峯の椎柴

簷早梅

日かけさす雨の軒に春ありとまた冬なからにほふ梅かえ

冬望

雪間よりたてるけふりそおもしろき冬こそ里は見るへかりけれ

歳暮述懐

過ぎゝつることはすへなしこむ年を今年のくれにならはずもかな

國教

天地のなしのまに／＼傳へ來て今も榮ゆるしきしまの道

賜暇旅行

御惠の餘りの露を草枕眞袖にかけてあふく旅かな

題山水圖

海山をたゝ一ひらの紙の上にあつめて見する筆もありけり

書

たゝなつく青かき山の峯の松緑の衣いくよきにけむ

美人晝寐

緑なすうちたれ髪のかなかき目をかけてやわたす夢のうち橋

柳

柳葉の香そかくはしき氏人の今かとるらむ神の御前に

稚童

いわけなく遊ふうなみそあはれなる心々は見ゆるものゆゑ

正述心緒

玉の緒のたえぬ限りはつかへてむ君と親との千世の御前に

爲君祈世

おきふしにわれはこひのむくれ竹のよゝの御あとにならひます世を

軍艦

富士八島名さへたのめてあら海の波の御かきのとのへもるらむ

碁

むらからすおはむとすれとうちよする波のしら濱あさりかねつゝ



望 遠 鏡

はるかなる磯山松もわかやとの池のみきはの物となりつゝ

窪田たつのか夫をむかへたるをいはひて

友鶴の巢こもる松の木かけにはやかてもひなの聲やそはまし

佐伯實秀か妻をむかへたるをいはひて

けふ更にたえぬちきりを結ふらむ松と竹との千世をならへて

旅順の海戦勝ちぬときよて

軍艦ともへならへてうつ筒にかゝなくわしも聲たえにけり

讀 日 本 記

唐あやに織りてはあれとしきしまの大和錦そ世々に傳へし

甲斐國駒城の人古屋三世の石碑の手向草に櫻を

よゝを経てかをりわたりし櫻花ちりて後こそ香は増りけれ

同じ時梅を

引き植し庭の教へのほと見えてあするよしらぬ宿の梅か香

帝 國 議 會

大君のみことのまゝに國人の心やすめむたはかりもかな

牛

つなかるゝ此身と何かなけくへき鼻繩つくる牛もあるよに

電 話 機

をちこちにへたて住む身の朝夕にあつさ寒さも語りあひつゝ

髪

うつり行くよゝの姿は少女子か結へる髪を見てもしらなむ

名取和作の婚姻をいはふとて

ひき植ゑてことほく庭に萬世をまつはめてたきためしなりけり

隧 道

夢にたに見すて過ぎこしうつの山うつゝにくゝる道もありけり

山田正倫の追悼に秋懷舊といふことを

まれにたにやとさて過ぎむ夜半もかな昔をしのふ袖の月影

おなし時菊を

うゑおきて君かめてけむ菊の花みるわか袖に露そこほるゝ

時 事 有 感

しへりあのあら野田になり畑になりわか國人を住ませてしかな



廣瀬中佐

沈みゆく船の上こえて三度うつ廣瀬の波の音のかしこさ

還俗尼

何か又よにはこかるゝ彼の岸にわたしもはてぬあまのすて舟

征露戦争のことを

三度まで沈めし船ともろともに消えにし人のいさををゝしも

草庵雨

晴れ間まつほとはさひしき東屋のまやのあまりになかめくらし

笠

日かけにも雨にもなれて親しきは身にかさしもつ三島菅笠

太閤

そのかみに君しおほはゝから山のあらしは今もたゝせしものを

まかろふ

ゆるされし名こそくちせね軍艦ともに其の名はしつみはてゝも

はまゆふ

うちよする百重の波とみくま野の浦の濱ゆふ花さきにけり

避雷柱

はたゝ神なるいかつちもつなかれぬ見ればはかなき柱なれとも

玉

数々の鮑しら玉得てしかな妹か手にまく緒にもぬくへく

八月の頃本澤温泉に湯あみせし時

いひもえす名つけもしらぬけしきかな箕冠山の峯の夕はえ

よの外の物とこそ聞け水の音鳥のなくねも山ふかくして

海玉 奥大將の乗馬星鹿毛をいふ

かちさひにかつ皇軍をうれしとや雲井をかける星鹿毛のこま

連驅逐艦の奮闘

たちまちにあたうちむけて漣のみふねのけふりたちまさりつゝ

皇后宮の捕虜の負傷者に義足を賜ひけることをかしこ

みて

露とおく秋の宮居のみめくみになへしえみしの足としもなし

わか海軍の七十七勇士

喜の文字を數ふるますらをやわか國人のかゝ見なるらむ



都岡美鹿の一年祭に郭公を

別れにし去年の餘波をほとゝきすさやかにとめむ一聲もかな

石川縣の人水嶋茂登爲の還曆の賀に若菜を

若かへる若菜を君になそへつゝ八百萬よもつまむとそおもふ

鐵 橋

いにしへにかけても聞かすはるゝとまかねの橋をおもひわたせと

蛭

大御子の數にはもれし蛭すらにくすしのわさはしるてふものを

自 轉 車

龍の馬も今はたのまし千里をも足にまかする車ある世は

源氏物語簞木の巻の中

わた殿のいつみのもとの夕すゝみいかにすゝしき心なるらむ

名取氏の菖蒲の園を見にゆきて

花あやめいろゝことに影さして底さへにほふ庭の池水

おなし時あるしよりいつれにても折れといひければ

いさゝらは折りてかさゝむ花あやめわれにゆるしの色をはしめに

思 遠 征 友

走り猪のかへり見せしとたけひつゝ今かこゆらむあたのとりてを

戦死の人をとふらふ

かはねをは野にさらしてもをゝしかる靈の光は世をてらしけり

中山種三の葬儀に柩の前にて

命こそ雪と消えぬれ國民の身にしむはかり名は残りけり

十月廿五日家に歌のまとありけるに米澤正與この日

男子うませたるよしきゝて其の席上にて

菊の花千とせの宿にけふうゑていく秋君か手にならすらむ

鯛

大君にまつる日つきとけふもまた鯛つりほこる沖の船人

賣 炭 翁

ひく駒の荷のをの霜を拂ひつゝ炭よふ翁聲寒けなり

小林窪田の人々よりは菊の花咲きたるを文机のかたへ

にとて鉢にうゑてたひむすめやす子は紅葉のうるはし

きを折り來てこゝにとて瓶にさしければ



色ふかき紅葉に菊にうつもれて文を見るにもあかぬ宿かな

暮林鳥

入相の鐘の音するをはやしにかへるからすの聲そくれゆく

いさましきもの

筒とれる百千萬の軍人つらもみたさてあゆみいてたる

銀行

咲きちるも時にまかせてこのやとににほふ黄金の花そまはゆき

寄物言志

武士の十字治川にたゝねともおそき心の瀬をはたとらし

夢山春曙

消ゆと見しそら眼は晴れて夢山の雪よりしらむ春の曙

酒折夜雨

降る雨を夜はのあらしのさそひきてみともしくらし酒折の宮

龍華秋月

春ならて月の桂の花やさく影たゝならぬ秋の夜ころに

石和流螢

宵々に飛ふや螢もいさわ川波に争ふ影そすゝしき

惠林晚鐘

怠らぬ御法の聲もうちそひて夕くれしるき鐘の音かな

金峯暮雪

まかゝやくこかねの峯の白雪はくれてもくれぬ色そ見えける

白嶺夕照

夕日てる甲斐の白嶺を眺むればめなれし雪の色としもなし

富士晴嵐

久かたのみ空に晴れて白雪の色もまはゆし富士の神山

九日やとの少女朝とく来て雨戸おす音に眼さまされて

頭もたくれば昨日までうらみたりし富士の山枕上に見

ゆ

明ぬとて鳴すや板戸の窓の外に今朝はと見するふしの白雪

惠林寺の鶴の松龜の松を

萬世もともなへとてや庭の松鶴と龜との名はおほせけむ

全富士見坐敷にて



世の中を思ひはなれて此のやとに富士見て過きむ春秋もかな

全梅花莊にて

梅の花名にさへかをるやとに來て咲きなむ春をおもひやるかな

三十七年七月三日萬葉居にて正興藤重等とともに百首

詠せし時の歌

春二十首の中

立 春 天

さしのほる日かけのとかに天つ空かすみそめてや春はきぬらむ

海 邊 霞

播磨湯明石のとより見わたせは霞たつなり淡路島山

曉 開 鶯

有明の月かけ霞むうめ園の春をうたひて鶯のなく

田 若 菜

ほのくくと松原かすむ住の江の岸田の若菜今やつむらむ

梅 花 夜 薰

さよ深く誰かくゆらするそらたきときしは梅の薰るなりけり

柳 拂 池 水

春風のふくにまかせて池水の波のあやおる青柳のいと

雨 中 春 庭

もえ出てむ夜のを草をおもふにはふる春雨もうれしかりけり

初 花

咲きそめし花のゑまひのめてたさを一年なから見むよしもかな

毎 朝 見 花

くもりなき日影あふきて朝毎に花見るはかりうれしきはなし

花 下 明 月

われのみか春は大方あこかれて月さへ花のかけしたふらむ

藤 埋 松

松か枝によせてかへさぬ藤浪をたれかは花のしわさとも見む

春 欲 暮

ちりそめし花をゝしみてまとふ間に春さへ今はくれはてぬへし

夏十五首の中

首 夏 朝



花の香の餘波尋ぬる朝庭の梢はいつか夏めきにけり

庭樹結葉

庭の面に夏をのかれむはしめそと葉廣くまかしみとりさすなり

聞時鳥

時鳥きゝもらさしとせし程に枕とりてもねられさりけり

時鳥遍

里わかぬ頃にもなれは時鳥きかぬうらみをいふ人もなし

時鳥早過

さはかりは何いそくらむ時鳥今は關もる人もなき代に

五月雨久

ふきそへしあやめもくつる板ひさしおもへは久し五月雨の空

草螢

草のはにすかるを見ればおく露をてらす螢やおもふとちなる

野外夏草

夏草はしけりにけりな旅人の笠のみ見ゆる野へのかよひち

水月如秋

うちよする波にたゞよふ月影は早くも秋をはこふなるらむ

山居夏興

夏しらぬ卵の花山の住居にはうきよのやみもしられさりけり

秋二十首の中

野草帶露

何となき草のかき葉の末までも露けく見ゆる野への夕くれ

風後草花

夜もすからすさひし風のつれなさをうらむに似たり露の葛原

遠初雁

ほのかなる聲はすれとも初雁の姿は見えす峯の白雲

聞虫

秋の野にたち出てゝきけはあはれさもまたさまぐの虫の聲かな

野外月

いろくゝにうつる花野の月影は空にしられぬ錦なりけり

海上明月

波の上をまかちしゝぬき行く船のはてまで見する月のかけかな



月爲友

ともに見し人は今なしおいらくのむかしかたらへ秋のよの月

紅葉未通

こき薄き紅葉を見れば露霜もなへてはおかぬ日數なるらむ

隣紅葉

あしかきの間近き庭のはし紅葉はしたなき迄あかぬ色かな

紅葉如錦

龍田姫おりてかけたるもみちは、大和錦と見やはまかはぬ

山寺暮秋

山のはの御寺の鐘の音すみてくれゆく秋の空そさひしき

水郷暮秋

もみちはの秋くれぬまに久かたの月の桂の里やとはまし

冬十五首の中

海邊時雨

さすらひしむかしの人をとひかほに時雨ふるなり須磨に明石に

寒草風

霜さやく奈須野か原の枯薄まねく袂をふくあらしかな

庭霜

かれはてし庭の千草におく霜をふたゝひさける花かとそ見し

雪朝

ふりつみし夜の間の雪にあともなし朝目しつけき庭の面かな

濱邊雪

よる浪の色も一つになりにけりしらゝの濱の雪の夕くれ

雪中遠情

はるゝとおもふ心のかよひちはいく重の雪もさはらさりけり

旅歳暮

旅衣きつゝこえ行く年波はわか身とゝもにかへらさりけり

戀十首の中

纒見戀

小車のをすふきかへす風の間にはほの見し人も戀しかりけり

不逢戀

かたゝにわきて流るゝ山川のあふせなきよの中そわりなき



夢逢戀

現には人めの關しゆるさねはあとなき夢を今はたのまむ

名立戀

をしみてもかひなきものを名取川なき名といはてこひやわたらむ

寄山戀

いかにしてけちやはつへき淺間山あさましまてくゆるおもひを

寄海戀

わたつ海のおもひふかめしわか中になとあた浪のたちさはくらむ

いはておもふ

徒に年をのみふる岩根松はいはておもふと人のしらねは

雜二十首の中

松風

色かへてともに年經し庭の松枝ふく風もときはならなむ

山路夕

くれぬとてかへる山路のおひ風につまきふかせていそく柴人

海邊朝

波風もなこの海邊の朝にはにともへならへていつる舟人

山家木

かけ高くたてる松の木まつこともなき山里に年は經にけり

幽徑苔

かよひこしあとなきあとをわけ入れはおく露深し苔の細道

原上行人

いにしへのあとをたつねてゆく人のかけなつかしき浮島か原

老後述懐

いたつらに老いはてし身を梓弓おしかへしてもなけかるゝかな

往事如夢

過ぎ來つるなにはのことはよしあしによらぬうきよの夢ときえつゝ

都

都へとおもひわたれとはかなくてひなの長路にとしをふるかな

都

時しあれは都となりぬ現つ神わか大君の千代田たからた

鞠



庭まりの遊ひはしけくなりけりをとこをみなのへたてなくして  
種 痘  
傳へてしいさをはしるしかりもかさ人の命のかりならぬよそ

三百六十六首詠

明治三十七年は閏年なれば三百六十六日あるによりこ  
の年の一年の日數にとれるなり よみすてたるまゝ

春七十首の中

春從東來

朝東風をいつる日影に先たてゝ國ぬちのとけき春はきにけり

山路霞

つゝらをり一重く にたちわけて霞あやなす春の山みち

江上霞

うらくと日影のとけき難波江の春をこめてもたつ霞かな

朝 鶯

なく聲に春をさそひて鶯の羽ふきのとけき軒の朝風

摘若菜

老か身もいてぬ年なきうれしさを野邊の若菜につみやそへまし

野 春 雪

立ちいてゝきのふは摘みし春日野の若菜もけふは雪の下草

梅花混雪

ふる雪にうもれし梅の花のみか色さへ香さへわかれさりけり

柳拂池水

池水のかゝみにちりもすゑしとてなひく柳そ朝きよめする

早 蕨

年毎にをりもたかへす大原女か山つとうれし峯のさわらひ

野 遊

少女らか心は野へにうつりけりつはなすみれの春のあそひそ

水郷春望

隅田川きしの家なみほのく、と船にまかひて霞む春かな

春風夜芳

春はまた何か厭はむ手枕のすきまの風も花の香そする

遅 日



うら／＼と霞む野山をわけくれと猶くれあへぬ春の日かけか

尋 花

呼子鳥聲する方や尋ね見むゑみてむかふる花もありやと

初 花

まち／＼て咲きぬる時は櫻花うちゑみてこそまもられにけれ

盛 花

櫻花今はさかりとなりにけりおくれ先たつ色もなくして

思 花

雨風のうしろめたさに櫻花おもはてすこそ春なかりけり

折 花

風にすらまかするものを一枝はわれにもゆるせ花の山守

瀧 花

ちらぬ間に瀧のしら糸ぬきとめよ梢の花は風もこそふけ

翫 花

けふもまた花にくらせるわかよこそあまねき春のめくみなりけれ

庭 花

あとつけむをしさもしらす櫻花またわかやとの雪とふらねは

花 衣

年毎になれぬる花のかり衣きつゝや永き春日くらさむ

花 挿 頭

むかしよりかはらぬかけにかくれつゝ花をかさして春はすこさむ

花 春 友

のとかにも春はすこさむ咲きにほふ梢の花をしる人にして

閑居落花

とふ人はたえてあらしの宿なりと花もうき世の外にこそ去れ

海邊落花

浦つたひ鹽くむあまか袖こえてよせくる波はさくらなりけり

花 未 忘

うつゝには思ひたえても夢やさは忘れかたき花のおもかけ

浦 歸 雁

浦波に聲を残して沖遠く霞わけゆく春の雁かね

雉



山のはに月も霞める片そはにあけぬとよむ雉の聲かな

春駒

消えそむる雪間の草やもえぬらむ霞む末野に駒ははふなり

苗代

しめはへし苗代小田にちる花をゆるすや賤かみやひなるらむ

蛙

さす月の影おもしろきかきつ田に夕ゐる蛙聲きほふなり

杜若

少女らか衣にするてふ杜若色ふかくこそ今は咲きけれ

躑躅

吾味子か衣の色に似たるかな夕紅乃につゝしのはな

款冬藏橋

いはぬ色に咲きてかくさる山吹に谷の岩はしたとりかねつゝ

橋上藤

藤浪の花さきしより紫の雲そたなひく峰のかけはし

隣家藤花

一重こそ隔てもしたれあしかきの内外をかけて匂ふ藤浪

老人惜春

老ぬれはわきて春こそ惜まるれ又あはさらむ又やあふらむ

春殘一日

いかにきていかに一日をすこさましけふをかきりの花そめの袖

夏六十首の中

更衣

花そめの袖の別れはをしけれとさすかに輕し蟬の羽衣

餘花

餘波おもふ人の心を心にて花さへ春におくれてやさく

新樹

文學ふ窓もをくらくなりにけりならの廣葉やかけしけるらん

庭樹結葉

春は見し庭の櫻の下蔭もをくらきまてに若葉さしけり

夕卯花

くれをしむ賤かそものうつ木垣やかても月のかけとなるらむ



卯花誰垣

ひまもなく誰か結びこめて卯の花のうき世へたつる垣根なるらん

葵

神祭るけふのみあれのころは草かけて妹脊の千世もちきらん  
月にまち雨にまつ夜もほと過ぎぬ山ほととぎすいつかなくへき

人傳時鳥

ほととぎす里わく頃のしのひ音は人傳にのみきゝわたれとや

初時鳥

まち／＼しうらみははれぬ時鳥かたらひそめし夜半の一聲

待客聞時鳥

まつ人におくれしとてや時鳥先わか門は音つれにけむ

遠時鳥

鳴きつとは聞けとはるけき時鳥さやかなる音を月はしるらん

近時鳥

あしかきのへたてもおかす時鳥さたかなる音になきわたるなり

曉時鳥

行きかへりなきわたるなり時鳥たか曉の寐覺とふらむ

海邊時鳥

遠つ人まつほの浦のうらみをは名にもかけしとなく時鳥

里時鳥

さやかにもかたらひわたれ時鳥しのふの里の名にはならはて

更替時鳥

餘波たに今はととめぬ時鳥かくれし山はいつこなるらむ

櫻

榮ゆへきをりにあふちの一本はうへなき色を花に見せつゝ

梔子花

年ごとに咲きて匂へと口なしの花にはものもとはれさりけり

早苗多

いそけとも猶とりはてぬ早苗には秋のたのみもかねてしらるゝ

薔苳蒲

あやめくさふけはしけこきをやなからよしありけにも見ゆる軒かな

故宅五月雨



日數へて晴間も見えぬ五月雨によもきか宿そふり増り行く

船中五月雨

五月雨は日數つもりの浦人も苦の雫に袖やくちなむ

水 鷄

月かけはさしもさゝすも柴の戸をたゝかぬ夜半もなき水鷄かな

照 射

あらしをかともす大串を命ともしらてや鹿のかけによるらん

鶉河欲曙

山本はまた明けねとも鶉飼舟下す一瀬のほとやなからむ

池 螢

水底にかけをうつして池殿のをはしま近くとふ螢かな

雨後聞蟬

雨晴れし夕日の岡の松か枝にすゝしくもなく蟬の聲かな

蝸

麓より峯の梢に傳ひ來て夕日をさそふ日くらしの聲

水邊夏草

ひまもなく茂りあひたる夏草に野中の清水くみそわつらふ

百 合

ひまもなく茂き夏野のさゆり花ねたしやけふも蝶をやとして

紫 陽 花

さまゝにうつろひ易し今よりは庭にも植ゑし紫陽の花

萍 花

ふく風にまかせてうつるよの中の人にも似たりうきくさの花

夕 顔

うゑおきし妹か垣根の夕顔の花こそ今は夕けはひすれ

晝 顔

水無月のてる日の影を命にて露もたのまぬ晝顔のはな

蓮 露

なへてみなにこりかちなる人の世をはなれて清し蓮はの露

湊 夕 立

船人の袖ふきかへす湊風にはかにたちて夕立そする

水月如秋



夏の夜の月影うつる水底にすゝしき秋や通ひそむらん

山居夏興

卯の花も藤も時めくわか山にほとゝきすさへなきわたるなり

扇

ふく風もすゝしき閨の妻あふきいくその夏か手にならしけむ

泉入夜冷

月影もふきくる風も何ならず泉そ夜のすゝみつまなる

野徑納涼

萩薄またきにおける露涼しこや夏の野の秋の通ひち

樹陰納涼

ふく風も泉の音のかよひきてすゝしさあかぬ松の下陰

草花先秋

來む秋の先おふ風もふかぬ間に招きかほなる花すゝきかな

秋隔一夜

夏と秋とゆきかよふらむ御稔川残る一夜を中つ瀬にして

夏旅

花そめの袂もあれと蟬のはの一重はかるし旅の衣手

秋七十首の中

初秋風

うち靡き秋に入野の夕風はまねく尾花の袖よりやふく

毎家有秋

海士か家も賤か伏屋もへたてなく同しあはれの秋のはつ風

海邊秋風

わたの原八十島かけてよる波のほにあらはれぬ秋の夕風

秋風入簾

かけ清き月の池殿秋たけてをすのひまもる風そ身にしむ

叢露

おしなへて茂る野のくさむらにひまなくおける秋の白露

風後草花

夜もすからすさひし風のあと見えてしとろになりぬ八千草の花

江萩

ふきすさふ波の音さへ身にそしむ眞野の入江の萩の上風



女郎花

おく露の白玉かさる女郎花たか爲にするけはひなるらむ

薄似袖

風にのみ招くとおもひし秋の野の尾花か袖は月もやとせり

藤 袴

紫の色さへ深きふちはかま人もきぬまにほころひにけり

葛

さはかりはうらみなはてそ葛かつら通へる風をくる人にして

暮天聞雁

夕まくれ雁なきわたる聲すなりいくその里をこえてきつらん

野亭鶉

露寒き野守か乃きに風たちてくるゝ籬に鶉なくなり

月下鹿

すみのほる月影清み小倉山峯のをしかの聲さやかなり

聞 虫

きけは又あはれそ増るおのかしゝ音になくむしの夜半の聲々

見 月

見る人の心のくまも乃こさぬやへたてぬ月の心なるらむ

月 漸 昇

月かけのいそかぬ見れは出て來し山のあなたや越えわひにけむ

山 月

笛の音も聞く心地してさやけきはあしから山の夜半の月影

野 月

吹く風に薄おしなみてる月の影もはてなし武蔵野の原

杜 月

久かたの空ゆく影も秋毎にくもる世しらぬ月讀の杜

月 照 古 橋

あけぬ間と月もむかしやてらすらむ影すみわたる久米の岩橋

瀧 月

影やとす瀬々の白波音清し月やつゝみの瀧をうつらむ

河水澄月

おなし名に流れて清き川水や月の桂のかけにすむらむ



磯月

いそふりのよするありその影見れば月もくたくる心持こそすれ

嶋月

風あれしおきの小島のいにしへもおもひそいつる波の上の月

月前旅

旅衣かたしく袖におく霜と見えしは月のやとるなりけり

驛路霧

うまやちのあやめもわかぬ夕霧に宿とひかぬる秋の旅人

稻妻

夕やみの雲間をわけて我か袖にはかなくかよふ稻妻のかけ

嶺月

みよしの、青嶺かみねは露清し月も宿かれ苔のむしろに

淵底月

光りなきものと思ひし谷川の底にやとれる月もありけり

袖月

あし引の山わけ衣身に馴れていくとせ月をみわの袖人

池月

年をへてくもらぬ池の水かゝみかけてや月の影うつすらむ

湊月

近江のうみ八十の湊に入る月の御船は空のものとしもなし

浦月

いたつらに年をつもりの浦波にいく秋月のかけをよすらむ

里月

さやかなる影にうかれて寐ぬものをたれか伏見の里といふらむ

崎月

沖遠くみちくるしほのみさきには波の千里の月そやとれる

閑居月

秋のよの月より外にふりはへてとふ人もなしよもきふのやと

月前友

たまあへる友まち得たり月影も心のかきりくまなからなむ

山家秋夕

なく鹿の涙も袖に露とおく枕の山の秋の夕くれ



露 深

處せき草の袂もわか袖もかわきそあへぬ秋の白露

雨夜虫

わひしらに聲しめるなりなく虫の涙や夜半の雨とふるらむ

鳴

さひしさはいつを限りの秋ならむ今宵もたえぬ鳴の羽かき

秋 望

かきろひの夕日は落ちて雁かねの聞ゆる田井に霧たちわたる

古渡霧

駒とめしさのゝわたり雪ならて猶わけまよふ秋の夕霧

終夜對菊

菊の露袖にうつして秋の夜をおきこそあかせ千世のかたみに

紅葉淺深

染めいてむこゝろくを紅葉はのおくれさきたつ色に見すらむ

雨後紅葉

碓氷山村雨過ぎし後見れば峯の紅葉も色こかりけり

紅葉映水

水底にしつく錦の色深し夕日やきしの紅葉そむらむ

露光宿菊

ふく風もこほさて千世の數そへよ菊にやとせる露の白玉

紅葉透霧

一色の峯の紅葉をうすくこく見するは霧のしわさなりけり

萬紅葉

時しらぬ巖も色に出てにけり萬の紅葉の錦重ねて

暮秋菊

別るとも契りはかりはおもひおけ秋のかたみの菊の上の露

暮秋夢

もみちはの餘波をゝしとおもひねの夢にも秋はとまらさりけり

惜 秋

めてゝ來し紅葉も今は散り過ぎぬくれゆく秋のをしきのみかは

冬六十首の中

初冬時雨

萬葉集



きのふまでをしみし秋の涙より時雨そめてや冬は來ぬらむ

時雨過

さひしさにさせる板戸をとひすてゝはかなく過くる村時雨かな

庭落

木のはより外にともなふ人もなしあらしのかよふ庭の細みち

落葉有聲

ちりてこそ木のははさわけ大空に音せしものは嵐なりけり

川落葉

大井川嵐にさわく水鳥のかつける波は木のはなりけり

關落葉

花ならてなこそその關にちるものはそめし櫻の紅葉なりけり

月照殘菊

おく霜にふたゝひ匂ふ菊の花月さへ秋にてりかへすらむ

寒 草

おく露に秋はしほりしわかやとの草の袂も霜の下草

寒 芦

風さえて夕霜さやく難波江やありしにも似ぬあしのむらたち

前栽霜枯

いろ／＼に見えし千草も枯れはてゝ籬は霜の花のみそさく

樵路霜

谷深き片そは道の霜くつれかよふ柴人ゆきなやむらむ

淵 氷

谷川の岩垣淵の薄氷紅葉のにしき結ひとめけり

湖水半氷

かたへには波を残して諏訪の湖水のはしもかけそめにけり

杜冬月

木枯の森はあらはに冬枯れてさゆる霜夜の月の寒けさ

泊冬月

風寒み一夜あかしの泊たにねられぬものを冬の夜の月

冬 望

冬深き田中の里の夕けふりたなひく末は霜くもりせり

浦千鳥



いせしまやいちしの浦の小夜千鳥更け行く空に友よはふなり

嶋千鳥

あはち嶋せとの波風寒き夜に友よひかはしなく千鳥哉

河千鳥

小夜ふけて妻とふ千鳥風寒き川せの波のたちゐにそなく

寒夜千鳥

月かけも空吹く風も氷る夜に友よふ千鳥聲しきるなり

網代

氷魚のよる時や來ぬらむ武士の八十字治川に網代うつなり

夕鷹狩

みかり野やふく風さえてはし鷹の尾ふさの鈴の音そくれゆく

冬野霰

狩衣すそ野のあらしさえくれて袖にみたるゝ玉あられかな

行路初雪

霜と見し空めはきえて道のへのくち葉の上に初雪そふる

月前雪

ふりつみし鏡の山の白雪をよなくみかく月のかけかな

雪未深

行く駒のひつめうつまぬ程見ればまた雪浅し野へのかよひち

雪後雨

さはかりは何をしみけむ庭の雪あとなき先に雨そよくなり

山路雪

行きかよふ心はかりはうつまねとふめるあとなし雪の山道

關雪

關守はすきすなりても逢坂の山の白雪猶とさしけり

氷上雪

池水の氷れるまては見し月も雪ふりてこそかけはきえけれ

杉雪

おしなへて雪ふりみりてり三輪の山しるしの松も見えわかぬまで

松雪

つまことにかよひなれたる松風もうつみはてたる今朝の雪かな

浦雪混波



雪ふれは色もわかれすみほの浦松原こゆる沖つしら波

社頭雪

雪ふれはゆふしてかけて石上布留の神杉神さひにけり

古寺雪

鐘の音もうつもれはてぬあしひきの遠山寺の雪の夕くれ

雪満衣

みのしろの衣の袖も拂ひあへす空よりよする雪の白波

依雪待人

ふりはへて人もとへかしわかやとの友まつ雪のあとつかぬ間に

里雪

ふみわけてさらにやとはむ冬も猶雪の花ちるみよしの山

竹雪

はらはすは折れもしぬへしくれ竹の一よのほとにつもるしら雪

炭竈煙

さひしさを空にしらせて炭かまのけふりにたつるをのり人

寒夜埋火

うつみ火のたえぬ限りを頼みにて寒き霜夜をおきあかすかな

冬雲

又更に空の衣や重ねらむ雪けにさゆる遠の山のは

冬煙

冬深くなりゆくまゝに飯かしくけふりも雪の下よりそたつ

冬木

白雪のうつもれはてし冬木立下にや春をまちわたるらむ

冬朝

雪ふかき清水かものと水けむりたてる朝そ寒けかりける

冬雨

朝北の風を南にふきかへて雪けの空は雨となりけり

冬山

もみちはの餘波もとめすなりしより風のみさゆる冬の山のは

歳暮忙

よの常にいそきなれたる身にも猶心おちるぬ年の暮かな

惜歳暮



とまらぬ習ひとかつはしりなから年をしまぬ年のなきかな

戀三十六首の中

忍 戀

時鳥しのふか岡の名もつらしさすかに音にはたてぬ物から

契 戀

かはらしな尾上にたてる山松のときはの色にふかく染めては

不言出戀

うつろはゝ又いかにせむ思ふ事それといはねの山吹の花

聞 戀

音にのみ聞きてやみなむ津の國の箕の面の瀧のたきつしら浪

疎 戀

風さわく雲間の月のおほゝしく見えみ見えすみわかぬ君かな

尋 戀

くらおきていさ尋ね見む三輪の山しるしの杉のありもあらずも

祈 戀

神さへや今はつれなき瑞籬のへたてよとては祈らぬものを

馴 戀

かにかくに人はいふともなれきつる衣よわれをしらはしるらむ

待 戀

夜を重ね待兼山の時鳥人の心もいつならひけむ

稀 戀

なか／＼に絶えはてむより天の河紅葉の橋をたのみわたらん

別 戀

しのゝめの峯の横雲かねこともまたつきぬ間にひきわかるらん

増 戀

五月雨に水増り行く谷川の音をきくにもぬるゝそてかな

切 戀

かけ高きちきの片そき片時も見ねはくるしきわかおもひかな

思 戀

石見の海沖ついくりの深みるのふかき思ひをしる人そなき

片 戀

山のはの片われ月をあはれともうしとしらぬ人のつれなさ



驚戀

あし引の山ほととぎすつれもなき人の寐覺をおとろかさなむ

變戀

色かはる野への草木のうへにのみふく秋風と何おもひけむ

忘戀

うき年をふるの中道あとたえて今は心もかよはさりけり

絶戀

いひよらむすへこそなけれ月日へてちきり絶えにしまゝのつきはし

恨戀

葛の葉をふく秋風のなかりせはかくまで人はうらみさらまし

遠戀

かきたえて見ねはいかにと白雲のよ所なる人をおもひやるかな

近戀

うつせみの人めをしけみあしかきの間近きかひもなくそふる

思出戀

吾味子のみぬめの浦の小夜千鳥思ひ出てゝはねにそなかるゝ

隔戀

さく花の色に出てつゝ春霞へたてゝのみや戀わたるへき

寄船戀

湊江にもやひし舟のつなをたえおもはぬ方にこかれそめけり

寄魚戀

餌こひするはいりの池のいろくつのうきては沈むわか思ひかな

雜七十首の中

日

天照す日の大御影よになくは萬の物はいかてしけらむ

風

乃とかなる御代になりぬとあけの風ねこし山こし今やふくらむ

煙

榮えゆく代をしるものはたちとたつ朝け夕けのけふりなりけり

夜

よそにちる心なけれはぬは玉の夜こそ文は見るへかりけれ

山



するかなる富士の高山たかくに高きを人の心ともかな

道

ふみたかへだかへては猶玉ほこの道ある御代に何まとふらん

岡

山城の双の岡は妹とわかかたらひくらす名にこそありけれ

原

今も猶傳へ來にけるかみことに穗屋のむかしもみさ山の原

池

いつみてもくもらぬ池の水鏡うつすにはちぬ心ともかな

河

物部の八十字治川の流にはよをへてよするあた波もなし

湖

神代よりうしはく神のみゆきをも氷に見する諏訪の湖

海

さし出る日影に見れはうちよする波もきらめく伊勢の海面

嶋

北の海えその千島は大君の御代を數ふる名にこそありけれ

里

津の國の生田の里に生くへくはうきことしらて千世もすまゝし

故郷

來て見れはむかしゆかしも山城の小野の故郷ふりはゆけとも

山家

おのつからかこへる雲を垣にしてうき世へたつるみやまへの里

田家

たれこめし田面の庵のこもすたれひまもる風に身をまかせつゝ

古松

雲かゝる高根に立てる一つ松苔むすまてに年は經にけり

菅

敷島や三室の山の岩小菅君か御笠に縫ひてさゝけむ

藻

川のせになひく玉藻のみかくれて思ふ心を知る人そなき

鶴



沖の波高師の濱の眞砂地に千世呼ひかはす鶴のむら鳥

鶯

大井川入江にあさる白鷺のみの毛しほるゝ波の夕風

鳩

暮れかゝる片山はたのうつほ木に雨よふ鳩の聲のさひしさ

猿

思ふことおほ江の山の宿直猿夜深くまもる聲のさひしさ

蜘蛛

さゝかにの手玉もゆらに引く糸のすちもあやある軒のつまかな

晩鐘

入相の鐘のひゞきのはつゝに乃こる御寺の軒そくれゆく

燈

ぬは玉のくらき心も照し見はあかくやならむ窓のともし火

車

千萬の車ある世は西東ゆきかひしけくなり増るなり

弓

そり高きあらきの眞弓いにしへにおしかへしても見まほしきかな

笛

ふきたつる笛のしらへの響きて心をすます夜半にもあるかな

書

うるはしき言葉の花のかをりをはむかしのふみの上にこそきけ

祝

たゝゆへきその國々は多けれと先日の本をはしめにはせん

太刀

敷島の大和心しみかゝすは太刀の焼刃もかひなからまし

碑

いにしへの益荒たけをの利心を今もあふかむつほの石ふみ

鯨

七濱の富てふ富をけふ得つと鯨とるをのたちさわくなり

漁客

すゝきつり鯛つり得つとほこらしくかへる船路にさわく夕波

市商客



市姫の神ししらすむあき人のあかき心のありやなしやは

行人過路

旅人の妻もたくへすいそきつゝ山路過きゆくあとの白雲

旅 泊

こきはてゝこゝを泊りの船窓に月もあはれをそへてこそすめ

幽 思

かくて世になからへつゝもゆく末の覺束なさをいかにしてまし

寄鏡述懐

わか盛りもしやうつるとます鏡とるにかひなき我姿か那

寄劍述懐

おもひてに今一度は玉つるきぬきてうち見む利心もか那

懷舊非一

ともすれはおもひそいつる數々に心くたきてすきしむかしを

探海燈

海路には闇こそなければよる波の千里をてらすともし火のかけ

水 雷

あた船のよせなはよせこ時の間にうち沈むへき器ある世は

明治三十八年

新年山 敕題

新高も高崎山も大御代の年のひかりや四方にさすらむ

征露のことにつきてはうれしきことかなしきことうち

交りて誰しの人もそれ／＼に心を盡すめれとおのれは

先かくこそと一月一日に夜明けぬにおきいててつく

つくおもふに彼の忠臣待且といへる故事のいとゆかし

さに筆とりて

おきゐつゝあしたまたれしいにしへを年のはしめに先や習はむ

新年机

初日影さしそふ窓の文机に先書きそめむ年のほきこと

書はかきに松と旭とあるかたに

年たつと色そふかとの松かえにいつる朝日のかげの乃とけさ

海上霞



松浦かたさわきし浪の音たえて船路のとかにたつ霞かな

野外霞

きゝすなくかた野をゆけはうらくと花もにほひてたつ霞かな

雨中鶯

雨霞むかやか軒端のつれくをなくさめかほに鶯のなく

曉鶯

曉の夢の枕をよひたてうつつにかへすうくひすの聲

摘若菜

年毎につめとおいせぬ若菜こそわかよの外の春の友なれ

山家梅

よのちりにしまぬ色香を山里の垣ねに見せてさける梅かな

折梅

梅の花今こそかさせ鶯のなきつる枝は折りうかりしを

水柳

ゆく水にかけをひたして青柳のはなたの糸や色にいつらむ

江柳

山本の入江の霞なひくかと見えしはきしの柳なりけり

餘寒氷

谷川の氷のひまにうち出てし浪もあとなくさゆる春哉

餘寒風

さきそめし梅さへしほむ心持して衣手寒し春の山風

春雪似花

袖かけて折らすは遂に春の雪花なりけりとまかひはてまし

野春風

浅みとり霞をわけて少女子か遊ぶ野のへに春風そふく

春月幽

天の川なかれもやらす中つせの霞の底にしつむ月かけ

浦春月

風早の三保の浦波音たえて松原霞むはるの夜の月

朝雲雀

うらくと霞むみ空になく雲雀朝日まつ間の聲の乃とけさ

静見花



あすさへに見むと思へはくれぬ間のこゝろ乃とけき花の下蔭

花前興

おもふとちかなてあはする物の音に花の色香もいとそひけり

雨後花

朝庭の露に色そふ花見れば夜の間の雨も心ありけり

分花山路

かへるさもおもはさりけりさく花の雲にわけ入る春の山路は

花下饒別

ともに見し花の色香を旅衣けふたつ人につゝみてそやる

茶 摘

あやたすきかくる少女の摘む手より宇治の木めやかほりいつらむ

山家春望

尋ねこぬ人はしらしなあし曳の尾の上の庵の春のなかめは

春 車

うらくと乃とけき春になりしより物見車のたゆる日そなき

新竹露

若竹のまたぬきあへぬかは衣のそてもはえある露の白玉

首夏藤

ぬきかふる人にならばはて松か枝は藤の花衣たちそ重ぬる

久待時鳥

時鳥となかぬらむけふくとをるやおよひもそこなはるへく

市時鳥

海石榴市の八十の衢の歌垣になれもなのか山時鳥

物めせとたつの市女かよふ聲をしはしたゆめてなくほとゝきす

軍營杜鵑

もりあかすとりてのかゝりかけふけてをくらき空になくほとゝきす

夏浦風

三保の浦すゝむを舟にかよひ来て袂をはらふ岸の松風

山夕立

先おへるいふきおろしのおとゝめて外山にかゝるゆふたちの雨

雨後夏山

雨過ぎし後せの山の夏木立緑したゝる色のすゝしさ



夕立晴

鳴澤に音を殘して夕立の雲はあとなしふしの神山

庭夏月

霜と見し心まとひに夏のよの月かけ寒し庭のまさこち

夏居所

河原風ふけとふかねと涼しきは水のゆく瀬の波の上の庵

森初秋

神のますもりの柳のゆふしてにすゝしくわたる秋の初風

萩露

萩か枝に白玉はやす露なからわかみめつ子の衣にすらはや

故郷虫

故郷の秋は悲しきむかし見し籬は虫のなく音のみして

野虫

秋の野におのかさまくなくむしの聲のあやをはいかゝわくへき

深夜虫

きゝしのふ秋のあはれもふかき夜の枕によわる虫の聲かな

雨後虫

はれ行きし一村雨の後きけはむしのなく音もすみまさりけり

池上薄

かけ見ゆるみきはの尾花袖ひちて池の底にも猶まねくらむ

移草花

うつしうゑて見るもめつらしおく露のしら玉はやす庭の七種

羅麥帶露

天地の恵の露やかゝるらむわかなてしこの花そ色こき

草の花瓶にさせり

八千草の花ををかめにうつしてそ野邊のあはれを宿なから見む

閑居露

よの外のものとも人はしら露のおきふしなるゝ蓬生のやと

野營月

露深きあら野の末をふみわけてあたもる袖に月そやとれる

月前雲

大空にひとりけ高くすむ月も猶うき雲はのかれさりけり



樵夫歸月

こりつみし爪木の眞柴負ひつれてくまなき月にかへる山人

菊盛久

露霜はおけと枯れせぬ白菊のさかりも久し秋の花園

暮秋葉

山梨の里の山柿えひかつら色つく見れば秋もいぬめり

夕落葉

あしひきの片山はやし風たちて木のはにくもる空そくれゆく

枯野月

さ夜ふけてさやく枯野の霜ふゝきかけさへ氷る月の寒けさ

庭初雪

ふりそめし雪のよそひもたゝならぬあしたの庭のたゝすまひかな

社頭雪

ふみわけむこともかしこし大神の御前の雪にあともなき間は

雪朝遠情

この朝け雪ふりみてもろこしのあたもる野へをいかゝとそおもふ

夕 雪

入相の鐘の響もはつゝにうつむはかりにつもる雪かな

雪中櫻

降る程は散るかと思えし梅かえの雪こそ花の数をそへけれ

冬遠情

雪深きうらるの山の山おろしふきかへさるゝ袖やさゆらむ

炭籠煙

炭かまのけふりの末はくれそめて雪け催す空そ寒けき

歳暮近

人ことのいそくを見ればくれてゆくとしの市路や近くなるらむ

除 夜

月も日も今は残らす一年のをはる今宵をいかにをしまむ

鶴

波風やしつけかるらむ朝ほらけたつなきわたる浦のはつ島

第一軍司令部の河を徒渉するかたに

雨とふる矢玉の中をまくり手にかちわたりする益荒雄のとも



得利寺戦後に我が兵の砲撃するかたに

天地もとろきわたる音すなりあたのとり出や今くつるらむ

一月三日佐伯實秀か男の子うませたるいはひに

乃とかなる年のはしめにおひ出て、千世よひそむる雛鶴の聲

伴正身かはしめてわか信濃に遊びけるに雪ふかき頃な

りければたく埋火のもとにのみくらせることをあかす

おもひて

夏來ませ山にもゆきて遊びてむむかしの人のあとをとめつゝ

酒

國の爲いくさのにはに出て行きし人をまち酒いつか乃むへき

海路風

さつまの海おひてふくなり眞帆あけて那覇のみなとにたゝわたりせん

旅行友

へたてなき友としゆけは草枕旅をうしともおもはさりけり

名所鶴

朝ほらけ千世よひかはすたつか音のふしおもしろし竹芝の浦

琴

おもひいてゝひく妻ことのしらへには松ふく風もかよひきにけり

二月九日の夜眞福寺にて里人を集めて講談めきたるこ

とせるに風いとはけしかりければ

里人とかたらふ夜そ冬木立ふきまくあらし心あらなむ

遠征軍を懐ふ

おもひやる袖さへ寒し筒とりてうちわたるらむ沙河の川風

貝

波よする浦のしほ貝櫻貝ひろふも御代のすさひなりけり

心

むかしよりかはらぬものは國民のまことを盡す心なりけり

下伊那郡飯田町なる上柳縁の父母の結婚五十年の祝ひ

に

萬世と契りかためし五十年のむかしの春もおもひいつらむ

波艦隊

あら海のもくつとならむゆく末をおもひしらてや艦はよすらむ



名取はつ子か身まかれるをかなしみてよめる

春雨のそほふる空につはめこそぬれても來たれかりこそはひちてもかへれつはめすらたく  
へるものを雁すらならへるものをつし花にほへる妹はいかさまにおもひおきてかつれも  
なくたくひもやらす天かけりかくりにけむ母も子も夫のみこともこいまつろひなけきい  
きつきせむすへのたときなけむとおもひやるわか衣手もひたぬれにぬれこそまされふるす  
とふつはめのことやゆくかりのことや

反 歌

花もさき月も霞まむこの里の春たに見すていにし人はも

榮ゆへきやとの垣内におほしけむ花も見はてぬ人のかなしさ

増澤門也ぬしの母刀自の八十八の賀に寄竹祝

八千船に八つなかけそへこきいそむさをには千世の竹やきらまし

おなし人の還暦の賀に寄澤祝

年ことに生ふる若菜のわかえつゝたのむの澤の千世をたのみね

五月の兼題の歌物せる折にほととぎすのはしめてなき

けれは尙賢翁のもとに

筆とれる折しもあれやほととぎす君につてよとはつ音しぬらむ

藤原半助の母身まかれりともしらてつねのことく宿り

けるに其の日なむ後のわさすといへは

しらて來し身をうらみつゝなき人をしのふ涙そ袖になかるゝ

矢野學校醫か醫師の道のことをよめといひければ旋頭

歌に

くすはしきくすしの道は誰か教へし大な牟遲少御神そをしへたまへる

露國と媾和の事はしまりけるよしきよておもふ旨あり

けれは

籠の中のものとはならししへりあのかゝなくわしをとりは得つとも

遠村竹

をち方にうきよへたつる吳竹のかきつの里や乃とけかるらむ

水

濁りなき心の底は大原やおほろの清水くみてこそしれ

夢

はかなくも身の行末をおもふかなあとなき夢のあとをとめつゝ

笛



ふく笛の一ふしもかな後の世につたへむまてはよしあらずとも

大捷利を祝ふ

ためしなく皇軍かちぬ天地もゆるするはかりにいはいはへ人々

龜

大神のをしへしなくは今の世にかふこもかくは榮えましやは

龜

何事も改まるよと文おへる龜も波間をわけていつらむ

二男正孝美起子をめとりけるよろこひに

しけりあふ岩根の松の相おひにそへまほしきは二葉なりけり

また道遠ければとくゆきてあはむすへもなければ美起子

のもとにいひやりける

たくへりときくにつけても飛びゆきてあひ見まほしき千世の友鶴

父君は今年八十四母刀自は七十九になり給ひていとす

こやかに並ひ給へりしを八月三十日に母刀自病の床に

つき給ひ一度はおこたらせ給ひしに九月十三日に再床

につき給ひやゝゝに重らせ給ひ十月九日午後七時三

十分に遂にはかなくなり給ひぬ御葬のわきをへて後

七日の間はらからうち歎きてよめる

ちゝの實の父の命はゝそ葉の母の命萬世と祈りてあるに天地の神やいまさぬよゝの祖の御  
靈やまさぬちゝの實の父のみことをうつし世に残したまひてはゝそ葉の母のみことはかく  
り世にかくり給ひぬうみの子のわかはらからはいはむすへせぬすへしらにこいまろひねの  
みなきつゝ朝ことに御墓拜むと夕さらすみあへまつるとをかなとを出て入るたひに父母の  
ならひまさねはちゝの實の父の命をはらからもなくさめかねてはゝそ葉の母のみことをし  
ぬひてをらく

ちゝの實の父につかふる兄弟も母いまさはと歎きつるかも

母刀自の御病重らせ給へる時かたへに待りて

しはしたにおこたりませと祈れとも母のみことは言もとはせず

十一月六日午前一時四十分にうひ孫よし子か生れたる

よろこひに

まちゝてやすらふ時にひな鶴の聲聞きそむることのうれしさ

また

おひそひし大木のもとの姫小松二葉の色のなつかしきかな



十一月十九日に清國鐵嶺より第一軍兵站糧備部長名取  
爲吉ぬしよりこたひ文部省より選奨せられしをいはふ

とて 教草つみしいさをのあらはれて高きその名は世  
にかほりけり とありければかへしに

教草年はつめともうらわかみおもふまゝにはしけらさりけり

序に遠征の君をおもひやりて

あるはふきあるはふるらむ嵐さへ雪さへいかにもろこしの原

觀 艦 式

武藏の海せはしときほふ旗風にみふねかゝやく波の上かな

ためしなきみいくさ船のいさをしをうち外の人をあふくけふかな

明治三十九年

新年河 勅題

新しき年波そへてありなれの河瀬乃とかにわたるはつ風

一日のあした筆試みるとて

ふく風も雲もみ空にをさまりて乃とけき御代の年そむかふる

新年梅

たちかへる年にはいかて後れしとはにへの梅も今朝はゑむらむ

初春風

乃とかにふきわたるかな朝日かけさす日の岡の春のはつ風

山 残 雪

山のはにたてる霞はにほへともまた消えはてぬ峯の白雪

野 外 霞

きゝすなく野は明けそめて青みゆく麥生の色にかすむ春かな

水 郷 霞

はるくとゆくせのけふりたちそひて霞もよとむ宇治の川面

霞 添 春色

浅みとり霞の衣たちそめて野山に見ゆる春の色かな

朝 柳

ぬきとめし柳の糸のしら露ににほふ朝日のかげの乃とけさ

行 路 梅

いく人の袂にふかくしみぬらむ道の長手にかほる梅か香



春月幽

久かたの月の桂はかほれとも霞める夜はのかけそかそけき

花前興

月清し花もうるはしいさこゝに今宵一夜はうたひあかさむ

春雨静

けふもまたふる春雨のつれくをなくさめつまや文のまきく

簷燕

年ことなるゝ簷端のたのしさを語るに似たるつはくらめかな

春曙

いつれをか先にとはましいひしらぬよしの初せのはるのあけほ乃

花似雲

雲をこそ常には花とまかひしか花をも雲に又まかひけり

月照花

照りあひてにほへる見れはさく花の雲は月にもさはらさりけり

旅宿花

咲きにほふ花の木かけにやとりてもやすいゆるさぬ旅の枕か

山花始開

春風のかよふにしるしわか山のそともの花のにほひそめぬと

花下送日

花の下に七日経にけりけふのみと家にはいひていて來しものを

花下忘歸

のりすてし駒さへ花にほたされてかへる家路もおもはさりけり

風静花盛

ふくとしもしられぬほと春風に香をさへそふる花盛かな

故郷董

むかしたれこゝにすみれの床しめてゆかり忘れぬ里となしけむ

歸雁遙

とほくしこしちをさしてゆく雁のたえくもらす聲のはるけさ

閑居董

世のちりは乃かれて年をふるやとにひとりすみれの花さきにけり

暮春川

今はとて散り浮く花の波高く春をなかさぬ山川もなし



海邊首夏

須磨の浦波路の霞はれそめて夏めきわたる淡路島やま

山新樹

花の雲消ゆと見し間によしの山みとりをわたる風のすゝしさ

庭樹結葉

ちりにける花のあとゝふ朝庭にみつえさしそふかけもありけり

野卯花

卯の花の咲きぬる時は白河の關路はやみもしられさりけり

窓新竹

さしそはむ千尋のかけのゆかしさをひとよに見するまとの若竹

外水雞

とり捨てし早苗流るゝ夕川のきしのおしまに水鶏なくなり

水鶏

垣ねゆくさゝれの水に音そへて草の戸ほそをたゝく水鶏か

早苗

時來ぬと沼江の早苗とりくゝにうけてそいそくたこのいなふね

山畦早苗

早苗とるふるの山田は暮れそめてくろにかたよる田子の菅笠

時鳥

きけと猶あかれぬものをほとゝきすなとさはかりはなきをしむらむ

聞時鳥

時鳥寐覺のともとなりけりなかく明ぬる夜のなけれは

螢透簾

ゆかしけにかよふ螢の光りこそをすの内外もへたてさりけれ

海邊時鳥

よる波の音にまきれてほとゝきすまつほの浦をなきわたるなり

虚橋薰風

たもとふく風なかりせは五月やみ花たちはなをいかてしらまし

袖上菖蒲

我か袖の物と定めてあやめくさとしのを長き根をやかけまし

夕顔

夕良の花のけはひのゆかしさにしらぬ垣をもとひてゆかまし



夕納涼

すゝみとる夕川きしのおはしまは秋にかたよる心持こそすれ

夏瀧

水鳥の青葉しけれ木の間より玉こきちらす瀧のすゝしさ

舟納涼

船うけて中つ瀬こけは袖にちるさをの雫もすゝしかりけり

夕立晴

きほひ来て軒にさわきし夕立の餘波の露にてる日かけかな

夜對泉

夜もすからはなれまうきは月影を底にひたせる泉なりけり

蜘蛛

かたふきし夕日の影にかたよりて梢とよもすひくらしの聲

山早秋

賤の男か柴とる山の下露の袂にしけき秋はきにけり

草花

めもあやににほへる草の花むしろしきつの野へは今盛りなり

籬朝顔

千代こめし竹の籬に咲きながらさかりはかなき朝顔のはな

閑居露

あする世をよそにはなれておく露の色さへふかしよもきふの宿

待雁

おくり來む玉章たにとおもふにもまたるゝものは初雁の聲

秋池

池水の底まで見えてくまもなくすめるや秋のこゝろなるらん

月如舊

くむ人の心はよゝにかはれともかけはむかしのまゝの井の月

野曉月

あさりせし狐も眠る奈須の野の曉月夜かそけかりけり

海邊菊

吹上の濱の白菊秋たけて花か波かと今も見ゆらむ

掛衣寒

外山ふく風にたくひて小夜衣うつ音さむし秋篠のさと



浦搦衣

よる波の音をきぬたにまきこめてうつや玉手もゆらの浦人

柿

色つきて數々赤き山柿の梢にあまる夕日かけかな

秋燈

よな／＼にあかすかゝくるともし火も秋ならてやはしたしまるへき

尋紅葉

露時雨もる山わけて尋ね見む初はな染のもみちありやと

觀楓

おもふとち秋の木かけにまとゐして紅葉にあける年のなきかな

朝紅葉

口すゝく小川の水に影さして朝めまはゆききしのもみちは

澗紅葉

光りなき谷の底にもそめ出てゝ下行く水にてる紅葉かな

初冬嵐

時雨ふり木のはみたるゝ袖寒しあらしや冬をさそひきぬらむ

船中時雨

富士川や下す小舟にとるさをゝしはしかすめてゆく時雨かな

里時雨

くれ竹のふし見の里のよるの夢むすふいとまもなき時雨かな

曉千鳥

曉の夢をさそひていせしまやいちしの浦になく千鳥かな

寒松

木枯の風はへたてすさそへともみさほかへせぬ松の正しさ

枯野風

見し秋の草は残らす霜かれて色なき野へをふくあらしかな

行路霜

賤の男か駒ひきつれて霜柱ふみしたき行く音の寒けさ

水邊落葉

ゆく水にさらすにしきは龍田川嵐のなかす紅葉なりけり

寒椿

花さきぬつら／＼椿つら／＼におもへは寒き冬の日かけに



風前雪

ふく風のよせるよせきてわかやとの垣根をこゆる雪のしら波

冬 籠

ひまもなくわらかき結ひて小山田の賤は今こそ冬こもりすれ

閨埋火

いくたひかかきおこしても明けかたき冬の夜寒し閨の埋火

歳暮雪

おしなへて野にも山にもふる雪のいつこわけてか年のゆくらむ

冬 庭

にほひてし花も紅葉もあとたえて雪のみつもる庭の面かな

福壽草

今のよの人のほりする花なれとすけなく乃みはすてもやられす

硯

うちむかふことのかたきをはつるかな硯の石のなるゝこゝろに

清しと見ゆるもの

朝日かけさしそふなへにちりもなき池の心のすみわたりたる

漁 村

あまの子か高くかゝけてほすあみにかゝる夕日のかげの乃とけさ

神功皇后

韓國をことむけまさむあらましは玉島川の鮎もしりけむ

北條時宗

雄々しかる君にあひては七度の使さへこそかひなかりしか

筆

朝夕にとらぬ日はなき筆なれとおもふまゝにはかゝれさりけり

遠くて近きもの

いくうまや重ねて遠き都路も一日へぬ間にゆきかよひつゝ

嶺上雲

挿觸の峯の白雲見ることにあふくは御孫のむかしなりけり

口惜しきもの

おもひ得し心をそれとことのはにあらはすことのならぬなりけり

教 育

わか園におほしたてたるをしへ草今行く末もおひしけらなむ



山家

山里の軒の古葉やはらはまし都の人をまつにつけても

寄稻祝

あし原の瑞穂の稻の名もしるくとしある御代をいはふけふかな

おほつかなきもの

園原に名はとゝめてもありてなき影はむかしのまゝのはゝき木

雀

たなつものもりはむことのなかりせはいかに雀のめてたからまし

鳥松

玉津島磯邊の松をふく風にしたうつ波も聲あはれなり

書

うち見るに世々の手ふりの偲はれてあく時しらぬ筆のあとかな

鯨

船人かもりとりくくにさわくなり沖への鯨今かよるらむ

藻

おきつ藻に邊つもはそへて海士の子は君かみけにと今またすらし

弓

よし人は筒とりほこる世なりとも信濃の眞弓猶やひるまし

漁客

波風のなきたる沖にすゝきつり鯛つりほとる海士の友舟

曉

怠らすつとめむと思ふおきてには曉おきやはしめならまし

鳩

むかつをに雲やたつらむ山里の軒の家はと年よひぬなり

風

ふきうつるしなとの風のなかりせはよのうき雲をいかて拂はむ

旅順開城の折我か乃木大将と敵將すてつせると水師營

にて會見せる所をうつしたる繪はかきに歌よみて書け

と人のいひければ書くとて

あらしひしこともきのふの夢なれや今はへたてぬ軍かたりに

同じ時松樹山砲台爆發のかたに

山はくえ人は埋れて天地にとゝろく音のすさましきかな



一月十六日母刀自の百日祭をかりやとりにてつかへ奉  
るとて日頃好ませ賜ひし餅など御前に奉りて

めぐり來し百日のみあへまつらむとぬかつく袖の涙寒しも

又盆栽の寒梅を御前にさくとして

けふ更にまつるはにへの梅か香を雪の下にもきこしめさなむ

車の中より諏訪の湖の方を見やりて

走り行く車の道はよ所にして氷の上をわたるたひ人

長野縣廳にて小學校教育効績狀は賜はりし時

愚なる身には覺えぬいさをゝも數へたまはることのかしこさ

城山館にて事務官縣視學郡視學師範學校長の人々の催

されし宴會に招かれし時

おきそはるこの城山のさゝの露短き袖にあまりぬるかな

松本女師範學校にて諏訪郡より出てし生徒たちの催せ

る茶話會に招かれて

人々のふかき情をいさくまむ宇治の木をめのかをりあふなり

効績狀を父君に見せ奉るとて

いさをしのしるしたはりぬちゝの實の父のみことよ先見そなはせ

近江の國八幡町西川重威か追悼歌會の兼題に花下言志

といふことを

麗はしき花の心を心にておのか一世を過してしかな

又春夕といふことを

ともに見し人をしのへはさく花のあはれもふかしくくれの空

凱旋せる軍人たちを迎ふる日扇を贈らむとて書きつけ

ける歌とも

かへる日はいつかと待ちし益荒雄をむかふるけふの万世の聲

佐伯清郷の婚姻をいはふとて

花ゑみにゑみかはせるや萬世もかはらぬ春のちきりなるらむ

故陸軍歩兵軍曹今井良平の傳をもつて其のしりへに

かきつける

後のよのかたみになれとうつしおくこのことはあはれとは見よ

年久しく都の有様見て來むとおもひわたりしに今度お

もひたちぬるうれしさのあまりに



いくとせかおもひわたりし旅衣けふたちそむる袖の追風  
都につき

榮えゆく都のさまをおもふにはおくれたる身もおくれさりけり  
赤十字臨時總會に出て、

皇后の宮のいまましをろかみ奉りて

人皆のあふくも高き秋の宮みかけをろかむことのかしこさ

新宿御苑を拜観して

さま／＼に匂ふ御苑の花の露短き袖にかゝるうれしさ

濱離宮を拜観して

松かけにくしな花さく御苑にはつるさへ千世をよひかはすなり

横須賀軍港にてとり得たる露艦をあまた見めぐりて

こりつまにあたせしあたの軍艦今は皇國のものとなりけり

鎌倉にて

天の下ふきなひかしゝいにしへを今はたしのふ白はたの宮

處々にて分捕の品を數多見て

數ふれと數へもあへぬつはものに吾か大君のみいつをそしる

七里か濱に遊ひて

浪をおひ浪におはれて遊ぶ間に豊はた雲そ沖になつさふ

家にかへりつきて

かへり來て都ほこりを語るには夏の長日も短かゝりけり

有賀實か母の追悼の歌會に夏哀傷といふことを

ほとゝきすなくにつけてもかなしきはかへらぬ人のあれはなりけり

又山徑苔といふことを

何となき露の色にも袖ぬれて苔の細道過ぎうかりけり

九月二日家に歌のまとゐりけるとき草花あまた折り

來て瓶にさせりければつとへる人々に

朝露にぬれて折りこし八千種の花のいろ／＼いかにとか見る

播磨國美囊郡細川村の内無穂村の小原太治郎か庭に松

梅の大木を集めまた千貫目以上の大石數多運はせたる

いはひをよめと人のいひければ先寄松祝

ひきうゑし松のときはをためしにてへぬらむ君か千代そはるけき

また寄梅祝



春ことに君かかさしとなる梅のあかぬ色香や年にそふらむ

また寄石祝

いつみてもいやふたならひめてたきはゆるかぬ石と君となりけり

十月九日母刀自の一年の御祭につかへまつりて

おきそはる袂の露は一年のむかしをしのふ涙なりけり

長野縣師範學校教諭淺井冽ぬしか勤續二十五年のいは

ひに今様ふりを

はたとせつみし窓の雪瑩のひかりも身にそひぬよはひ長野の城山に今こそむれゐていはふ  
なれ

廣きをしへにはなれてみさをたゞしき一つ松乃とけき影をしたひつゝ萬代よはふ聲高し  
をしへ子たちも人々も同じむしろになみゐつゝいはふことはの花ゑみに君ゑらゝゝにゑま  
るらむ

黒川博士身まかりぬときゝて博士は枕の草紙をよくよ

みとき賜ひぬとあれは

とりなれし枕を遂の枕にて常世にいます君をしそおもふ

加藤清正

いそしめる君かをしへにはなれてましらも筆やとりならひけむ

明治四十年

新年松 勅題

初日さす大内山の峯の松風も乃とかに年たちにけり

羊のとしの一月一日筆試みむとて

筆とりて先こゝろみむ新しきひつしのこ毛けふをはしめに

朝 賀

宮人かみかとをかみのあやの袖おもたゞしくも見ゆるけふかな

柳 絲 新

春風のかよひそめたる門邊には柳のまゆそ先ひらけぬる

門 柳

わか門の柳の糸につなかれて道ゆく人そ過きかてにする

柳 隨 風

ふけはふくまゝになひきて春風をつなきもとめぬ青柳のいと

待 鶯



とくいてゝひかり乃とけき君か代の春うたはなむ谷のうくひす

鶯呼客

時はしもいつはあれともくる春にしく時あらめや鳥はしもさはにあれとも鶯にしく鳥あらめやありとしもしられぬ庵も春くれば鶯來なき鶯の聲をしるへに知る知らぬ人もとひ來て鶯のなくなる春そたのしかりける

この春もまたぬに人のとひくるはなく鶯のあれはなりけり

松上鶯

松風の春のしらへに一ふしをそふるもおかし鶯の聲

竹鶯

吳竹の夜床はなるゝ鶯の聲おもしろきあけほのゝ空

梅鶯

梅か香をおのか羽ふきに匂はせて聲もあやある枝の鶯

閑居鶯

かくれ家に來居る鶯春毎になれもうきよをのかれてやなく

野鶯

霞たちかけろふもゆる春の野になく鶯の聲の乃とけさ

隣梅

さしなみの隣のをちか年まねくおほしたてたる一もとの梅こそさけれ其の梅の香こそにほへれ朝夕にをちは出てゐていやめてにめてのあまりに糸竹の遊ひもすめり中垣のへたてはあれとおかしさの見えしわたればこなたより留とり出てゝ一ふしをしらふる時にかなたには琴とりすゑてちる梅をかなたかはしぬ一もとの隣の梅にむらきもの心へたてすすかの年の永き春日を遊はひをらく

早春梅

心ゆく隣の梅は中かきのかなたこなたもへたてさりけり

雪中梅

つくろはぬやとの垣ねに春きぬと先とけそむる梅の下ひも

夜櫻

ふる雪に色はわかねとさく梅の匂ひはかりはまかはさりけり

梅

雨霞む軒端の梅の立枝よりこぼるゝ露も花の香そする

松残雪



春霞たなひきわたるあしひきのをへの松の秀つ枝には鶴か巢こもる下つ枝には花かにほ  
へる鶴ならば聲もたつへし花ならばかをりもすへし杖つきて山路こえつゝ真近くもよりて  
し見ればわかもひしたつにもあらず吾かまちし花にもあらず山松の枝に乃これる雪にそあ  
りける

山春雪

待ちわたる花にまかへてよしの山木ことに春の沫雪そふる

湖上春望

諏訪のうみの氷の上に益荒男はますらをとち小女らは小女らとち手携へ遊ひし時はかたか  
りし氷の橋も三冬つき春にしなれはいつしかとあとなくとけて春風のわたれるなへにうら  
うらとさゝ波よする衣か崎小坂高濱舟うけてこきたもとほり鮎とるとこきくる小舟鯉とる  
とこきくる小舟木のはなすはらゝにかひ浅みとり霞の間より天の原ふりさけ見れば駿河  
なる富士の高根の白雪の眞白に見えてあやにゝおもしろきうみそ諏訪の湖  
春毎にかくし遊はむ諏訪の湖常世の波の常翁にて

春風

玉すたれゆらきそめたるあしたより日にけにかよふ軒の春風

橋春風

うち寄する浪もなこみてうらゝと濱名のはしに春風のふく

春雨

處女子かいろゝ衣おるはたの音の乃とけき春雨のそら

野雲雀

雨晴れて麥生色こき野つかさの空をせはしとなく雲雀かな

櫻花

日の本の種をうつして櫻花からもろこしに植ゑわたしてむ

公園花

誰もみな心ゆるせる花園に春をうたはぬ人はあらしな

旅中見花

乃とむへき家路ならねと乗る駒をしはしとゝめむ花の木かけに

花下逢友

ゆかしさも一しほそひぬゆくりなく友に逢ひぬる花の木かけは

年々見花

年毎に見れともあかぬさくら花いつの春にかおもひ忘れむ

名所花



上野山杉の木の間を見わたせば香こめにほふ花の白雲

故郷落花

ちる花のふききにくもる心持してめもはれやらぬ小野のふる里

折花

春霞たなひきわたるあし引の山路を來れば櫻花咲きこそいつれ其の花の色をゆかしみ其の花の香をなつかしみかけさらすわかめてをるにちりもせず風もたねは世の花に似てしもあらずかくはかりたへなる花をいたつらに見てや歸らむ一枝は吾か父母に一枝は吾か友かきにさくら花折りてまたせむゆるせ山守

暮春海

わたつみの春もくれぬとうちよする浪の花さへけふはちるらむ

春植物

音もなくふる春雨をぬきとめて白玉はやす青柳の糸

山吹の花さく春は巖さへくちなし染めの衣きにけり

春動物

いく年か物忘れせぬつはくらめ人の心もかゝらましかは  
こなきさく野澤の水の夕月夜聲もをします蛙なくなり

雲わけてあかる雲雀の聲々に空ゆたかなる春をなく也

小平千代吉か郷里にかへるをおくるとて

八年経て馴れ來し君をけふ更に別れまうくもおもほゆるかな

首夏朝

朝戸出の袖また寒し夏衣うの花染めを身にはそふれと

川新樹

東の都わたり川はしもさハにあれとも廣さきの隅田のつみ春過ぎて夏し來ぬれば瑞枝  
さす櫻のもとにすしくも風こそかよへひまなくもかけこそしけれ其の風のかよへるなへ  
に其のかけのしけれなるなへに車より船よりおりて宮少女とねり男も老たるも若きもつとひ  
木の芽飲み酒みつきつゝ糸竹の遊ひもすなり若葉さす隅田堤は見れとあかぬかも  
隅田川春見し花のかけとめて若葉めつへき時は來にけり

残花

戀しくは見てを忍へと春風やふき残しけむ花の一もと

早苗

ゆたかなる秋のたのみをゆふたすきかけてや田子は早苗うらむ

五月雨



きぬあらふ少女かともゝいとまあれやなかめのみする五月雨の頃

鵜 河

はかなさも知らぬ鵜舟のすてかゝり明くるうらみを岸に残して

時鳥未遍

聞ききかぬことのはくさも時鳥またとりくくにほふころかな

都 時鳥

山にのみなきてをらしと時鳥なれと都の空いそくらむ

時 鳥

村雨にさそはれいてゝ時鳥なくや高まの山邊つたひそ

時鳥遍

耳うとき老の身にさへ時鳥きかぬうらみはなくなりけり

市 西爪

うちわりていつはりいはぬ市人の赤き心をうりに見るかな

夏 月

夏の夜の月もなひきてすゝしきはかけさす窓のいさゝむら竹

竹亭夏月

門へにはいくみ竹生ひ窓へにはたしみ竹生ひ千尋ある影におきふし世の人のうらやむ庵は  
風清き夏にしなれは若竹のかけさしそひておく露の玉をさやけみさす月のかけをすゝしみ  
いくみ竹いくみより来てたしみたけたしにかたらひ夏の夜のすゝしき月に遊はひをらく  
窓さしてなかも明かさむ風そよく竹のはわけの夏の夜の月

夏 月 涼

つゝめともつゝむにあまる涼しさを袂に見する夏の夜の月

池 螢

墨染のこの夕くれに池の面を見つゝしをれは水草より葉乃ほる露か梢よりこほるゝ玉か露  
にあらず玉にもあらてかゝみなす水にうつるは螢なりけり

螢 狩

おもふとちあし早小舟こきつれて螢かりせむ天の龍川

川 夕 立

水無月のてる日をいたみ富士川の岸へにたては俄にも日かけかくろひ雲の峯やゝくつれつ  
つはたゝ神い鳴りはためきかしこくも思へる時に富士の根ゆ雪ふりおろしふきとふく風も  
すさひて夕立のはけしくなれハ時の間に濁りにけりな富士の川水  
はたゝ神なる澤くたる夕立の雨こそさわけ富士の川面



里山吹

陸奥のいはての里の里人か里ふるさしと垣根にも園にもうゑし山吹の花をし見れば朝露に  
にほひをふかめ夕露に色をふかめてうちなひく枝もとをゝに妹に似る姿ゆかしき山吹の花

籬夏菊

夏なからかをりわたりて夕月のかけも秋めくませの白菊

夏川

秋近くなりやしぬらむふく風のかたへすゝしき天の中川

夕納涼

湯あみしてそゝろありきをわかすればまたき秋めく袖の夕風

垣夕顔

とひよらむたそかれ時の袖垣にゆかしさそふる夕かほの花

樹陰蟬

夕附日さすや岡への小松原木かけしくるゝ蟬の聲かな

夏風

手にならず扇のつまにさそはれてふきいるゝ窓の風そすゝしき

野藤袴

武藏野の若紫の藤袴ぬしなつかしき香にそ匂へる

山萩

足引の山路の小萩うるはしく咲きにほひつゝつゝらをりこのもかのもに唐にしきおるか  
と見えて紫のゆかりゆかしもあしたには露もおきそひ夕には鹿もめつらむあし引の山路の小  
萩見れとあかぬかも

秋山のをてもこのもに咲く萩のにしき見て來む露にぬるとも

初秋虫

野邊見れば露もこそおけ空見れば風こそかはれ其の露のこほるゝなへに其の風の秋めくな  
へにこゝかしこ虫の音そする今ゆ後よひくゝことに虫こそはなきもよりなめ我れこそは聞  
きもわひなめはかななる露と風とをいきのをにして

今よりの秋のあはれを草むらに知らせかほなる虫の聲かな

海邊秋風

玉くしけ二見の浦の沖見れば波そ來よするへた見れば萩そさやける其の波の穂にやたくへ  
る其の萩の葉にややとれる沖にへにふく秋風そ身にはしむなる

夕虫

露結ふ小萩かもとの夕かけに聲なつかしく虫そなくなる



庭月

野となれとむら／＼うゑし百草の花を匂はす庭の月影

海人見月

あはれとは海人も見るらむ船窓をおしあけかたの波の上の月

漁村月

ほし捨てし網にかゝれる月影をさなからにして海士は見るらむ

見月

ひとりしてしのはむよりは思ふとち語りあひても月は見てまし

秋夕

乃かれ得ぬ秋のあはれをしはしたにまきれむやともなき夕かな

湖上月

大神もいてましぬらむ諏訪の湖衣か崎の清き月夜に

初雁

さらたに露けき秋を初雁の今朝なく聲にぬるゝ袖哉

深夜雁

秋の夜の更け行くまゝに久方の月もすみゆき科戸邊の風もこそふけ其の月のすみゆく空に

其の風の身にしむ夜はに天傳ふ雁かね聞ゆ吾妹子に衣うてとや賤の男にわさ田かれとやうちつれてなきゆく見ればあやにかなしも

秋夜長

更けぬとも明くともしらぬ秋の夜にいく巻ゝかまきかへしけむ

瓶中菊

菊の花瓶にさせれば露霜のうしろめたさも覚えさりけり

庭菊

わか宿の庭のむら菊露霜はおけと枯れせず村時雨ふれともあせずおのか經むよを長月と眞盛りに咲けるを見れば山吹を白にもかへし紅を黄にもかへしてあやはとりくれのはとりか足玉も手玉もゆらにさや／＼におるはたなしてあやに／＼見れともあかぬ庭のむら菊

鳥菊

ぬれつゝも露なからきむ麻衣田みのゝ島の菊の花すり

案山子

あるかねと天の下しる久延彦の神のみたまやとし守るらむ

山家秋興

さゝ栗もあけひもゑみてうなるらのあくことしらぬ秋の山里



鹿聲催涙

吹く風に秋のあはれをさそひ来てわか袖ぬらすさをしかの聲

秋晴

眞さやかに晴れゆく秋の富士のねはいよ／＼高く見えわたる哉

山路紅葉

露にぬれ時雨にそめて紅葉はの匂へる山のつゝらをりをりのほりつゝゆく／＼もかへり見  
すれば左にもこそめ薄染め右にも薄染め濃染め龍田姫五百機たてゝさゝらかた錦のとはり  
千五百むらおりてかけたり秋の山路に

紅葉交松

枝かはす松のみとりをあやなして染むる紅葉の色そえならぬ

暮秋薄

露霜の秋の末野のはた薄わかわけゆけは朝はふる風そふきける夕はふる風そあれぬる風の  
むたなくひく尾花のしはしとてうち招けともとまれとて袖はふれとも紅葉はの過ぎ行く秋は  
とゝまらなくに

海邊初冬

波のほに時雨も見えて廣崎の清見の浦に冬はきにけり

峯時雨

むら時雨めぐり來ぬらむくしふるの峯の浮雲たちさわくなり

木枯

拂ふへき木のはも今は残らねと枝には残るこからしの聲

落葉深

ふりうつむ木の葉を見れば絶えはつる道は雪にも限らさりけり

田霜

朝日さす苜田の面の霜柱くちゆくかたにあさる鳥哉

寒月照浪 月照上人五十回忌奉樂題

さつまかた思へは寒し波のほにあらはれいてし冬の夜の月

氷駐船

山川を下しもはてゝ高瀬舟つなけるつなは氷なりけり

待雪

籠居のいとなみなりぬ賤かやの垣ねにふらむ雪やまたまし

雪中客來

ふりうつむ折戸の雪にとふ人の心ふかさもしられぬるかな



井水

ふきあれし夜の間の風の寒けさに板井の水の今朝は氷れる

野雪

空寒みあらしたえせぬ奈須野には雪の浪さへたへすよすなり

連山雪

うちわたす山のうねくくまもなしいかにつもれるみゆきなるらむ

名所雪

入りにけむ人のむかしを思ふにはよしの雪もうつめさりけり

庭雪團

うなゐらか庭のすさひの雪まろけ神の御面もさやけかりけり

古寺雪

くちのこるいらかのつまも鐘の音も雪にうもる峯の古寺

雪滿群山

はれゆきしあしたに見ればふり積る雪はくまなし越のむら山

雪埋山路

鐘の音は猶通へとも雪深きひえを外山の道はたえにき

遠炭竈

たち乃ほる煙の末もはるけくて雲ゐにさゆる峯の炭かま

冬曙

うちつけに花とのみこそまかひしか霞まぬ木との雪のあけほの

冬魚

網に入る魚やなけかむ諏訪の湖水の下もやすからぬ世を

冬浦

この頃は烟もたえて鹽かまの浦風のみそさえまさりける

冬市

物めせとよふ聲さえぬ東の市女の小笠雪白くして

待春

われのみか軒はの梅も色めきて今いく日とか春をまつらむ

爐邊會友

埋火のあたりに友とまとゐして春ほのめかす歌かたりかな

海邊寒月

とちはてゝ波さへたゝぬ北の海の氷をみかく月の寒けさ



學者惜年

をしむともとまらし年と思へともよみをへぬ文をいかにしてまし

冬述懐

寒しとも覚えさりける冬の日をなけくはかりに老にけるかな

淵水鳥

波たゝぬ淵はしめても水鳥の上毛の霜は乃かれさりけり

雪中歳暮

ゆく年のいそくともなくふり積る雪なからこそくれはてにけれ

歳欲暮

さりともと思ひつゝ猶過す間にはたや今年もくれむとすらむ

今年はやくよりよからぬ事多かりければ年の暮に

いと早も暮れなはくれようき事のつもれるとしを何かをしまむ

内閣

ふさねもつ百千萬の政事まをすつかさや國のいしつゑ

統監府

大君のまけのまにく韓國のことゝるつかさいや榮えつゝ

漁夫

いかはかり幸あるけふの海ならむ波にきほへる海夫のよひ聲

關東都督府

ことさへく韓の國より八十船のみつき寶を年の毎に奉りけむいにしへゆ稀なる御代ともろ  
こしの關の東に天皇の遠のみことをかしこくもはしめ給へはもろくの官人たちもろくの  
の大御たからは數知らすわたりいゆきてとりくにはけみいそしみ外つ國の人まもる來ぬ  
あきつ神吾か大君の大みいつかゝやく見ればたふきろかも

伯理 米人

今の世に君しいまさは日本の本の國の榮えも見せましものを

共進會

末かけて頼みわたらむ物さはにつとへてきほふ四方の國民

女友とち物語りす

語りくさ何とはなしにゑみかはす少女か友や楽しかるらむ

小松原に鶴たてり

あけわたる小松か原にたつ鶴の朝日待ちとる聲の乃とけさ

天の橋立の圖に



見るたひに神代をかけてはるくと思ひそわたす天の橋立

石灰甕にけふりたてり

釜なしの高根おろしやたえぬらむ石やくけふり空に棚引

松の枝に苔かゝれり

年ふれは山松か枝も老にけりかゝれる苔に霜のおくまで

名所浦

ことのはの玉の光りをうちそへてむかしにかへせわかの浦波

朋友

折とはたかふとすれと親しむやへたてぬ友の心なるらむ

聞琴

妻琴のゆのてもあやに聞ゆるは誰か心ゆくすさひなるらむ

漁舟連波

沖遠くはらゝにうきてうち寄する波に交れるあまのつり舟

窓中残燈

きえ残る學ひの窓の燈火のはつくくに猶道たとるかな

曉天山

曉の遠山鳥の尾のへより晝のひかりやさしそめぬらむ

眺望

海原の波の千里をゆく船のあと見えそむるあけほの空

詠史

家の風吹きしわけすはみくさかる鎌倉山に旗はなひかし

船かへすなりかふら矢の音よりやいさましき名を世々に傳へし

あらをたをあらすきかへしくてそ織田の田長は君につかへし

餐庭松

木高かれしけれとのみも思ふかなれしをしへの庭の若松

僧侶

彼の岸にわたりおほせて見る月の光りややかてさやけかるらむ

述懐

虎吼ゆるからもろこしのはてまでもわかしきしまの道造りせむ

瓢

益荒男かいさをの數によみそへて世になりいてぬ天のよさつら

虎



鳴神の音か響くと聞えしは眠れる虎のいふきなりけり

旅行山

家人はまちやこひなむ旅衣袖ふる山の名をもたのみて

歸省

はひよりしむかし覺えて父母の御膝をろかむけふの尊とさ

詠史

語部の語るかまゝに傳へ來て遠きむかしもしるき國ふり

山家

松の戸はたゞく嵐にまかせおきてまつこともなき山の奥かな

瀧

山彦の響もそひて岩たゞく音のをゝしき峯の瀧つせ

帝國大學

おりたちてあさらは玉もとり得へしふかき學ひの海のそこひに

讀書

文よめは樂しかりけり昔令見ぬ世のことも眼の前にして

商賣

偽らぬ心を海の内外にみて足らはさむあき人もかな

小縣郡傍陽村宇萩牧内周右衛門の八十の賀に

千曲川八十瀬をこえてゆく水はこしちにいてゝ千重ふかむらむ

同じ賀に寄松祝

百かへり花さく春を君そ見む松のときはの常翁にて

同じ賀に寄萩祝

おく露の白玉はやす萩か枝を千五百の秋も君かさすらむ

四條驛神社献詠寄弓祝

梓弓ひけは寄り來る本末のかはらぬ御代を猶いはふかな

西筑摩郡山口村山口村長宮下虎三ぬしか教育効績狀を

賜はれりときよて

教草をほしゝいさをあらはれて花さく春にあへる君かな

五味繁作か今年四月十日に妻をむかへたりときよてい

はひの心を文のはしに

妹と春といや二ならひ榮ゆへき契りもふかき宿の春かな

小池村平か征露の戦の時金鶏勳章並に年金を賜はりけ



るをいはひて

人はしもさはにあれとも物はしもさはにあれともいさをしき人そむかしき眞くハしき物そ  
尊き底清き小池のあせは大君のみことかしこみ左手に筒とり持ち右手に玉とりこめていさ  
ましくあたうちなひけ平らけくかへりまゐ來てかへりこと聞え奉れは武夫の-highいさをと  
ほめ給ひめくみ給ひて空かける鴉のみしるしまかゝやく黄金白銀かしこくも下し給ひぬた  
たはしき祖先の名おひてうみの子の八十つきくゝに萬世に語り傳へむおむかしき人のいさ  
をも鴉も黄金も

賜はりしこかねの鴉は萬世にくもる時なくかゝやくへしも

深瀬隆健の七十七の賀に寄鶴祝を

おのかへむ千世にあえよと仙人の手かひの鶴のいてゝまふらむ

岡村御蔭の遷曆の賀に

今年より色そふ松の若みとり若かへりつゝ千世も經ぬへし

近山勝右衛門の金婚式のことほきを松によせて

影高き妹春の山の峯の松いや二ならひ千世も經ぬへし

海上胤平翁か八十の賀に寄稚祝

年毎に拾へと盡きぬ椎の實の數こそ君かよはひなるらめ

又寄梅祝

梅の花千年をかけて梓弓八十の春にさきにほふらむ

名取良正の古稀をことほきて

緑子か乳房したへる母澤の七瀬こえてもやすき君かな

木曾の山口村青年會雜誌發刊の一週年をとしとゝもに

迎ふるほきことにとて

入りそめて山口越えて一年をむかふる方の奥そゆかしき

葛城藤重か渡米するをおくらむとて會せし席上にて

をりくゝに音信はせよあめりかの遠き島根にゆきわたるとも

おなし人の留別會の席上に新秋風といふことを

ふき結ふ露より先にわたるなり草の袂の秋のはつ風

又瓶中草花

とりくゝにゑめるを見れば花瓶の草も心のありけるかな

矢野氏か米國にゆくをおくるとて扇に書きつけゝる長

歌短歌

ものゝふか矢ふすまたてゝひきはなつ矢野の吾か兄あめりかの廣き島根は眼かゝやくこか



ねしろかねものさはにみちたらはしてめつらしき花さきをよりおもしろき名所ありとへさく花を折りかさしもち名所を糸にもうつしてこかねをら糸をら物をら大船につみたらはして明日のこと歸り來む日を待ちやわたらむ

うゑわたし折りかさすらむ花よりもかくはしき名をあげよますらを

宮下郡視學上伊那郡赤穂學校へ轉任すときよてのはしに

さそふ水ありと知りせはかねてよりとよめむすへもあらましものを

立澤小學校にいきける時唱歌室の額に物せよと請はれ

ければ

ゆく雲もたよはしけむいにしへの人にもならへうなゐらかとも

堀秀成翁二十年忌に寄琴懷舊といふことを

さやかなる琴のしらへをきくことにおもふは人のむかしなりけり

有岡千言の追悼に寄月懷舊といふことを

涙にはくもりなからにやとるかなむかし忘れぬ袖の月かけ

岩本尙賢大人身まかり賜ひぬと承はりいそき参りて

父のみの父ならなくに父のことかき撫て賜ひはよそはの母ならなくに母のこといつきなつさひ萬世にかくしもかもと明暮にあふけるものをわか大人は常なき風に天雲のけぬるか如

く天かけりかくりましぬと玉章の使はいへと正しかる文をも賜ひめてたかる歌をもたひし此頃の大人のたよかに眞事とも思ひそあへぬ玉ほこの道ゆく人に人毎に問へとさけへと一人たになくさめ得ねはすへをなみねのみなきつよたよはせに走りまゐ來てなつさひし大人の御前にぬかつきて偲ひそ奉るおも父のこと  
参て來て御前おろかむわか袖に氷る涙をとくよしのなき  
あはれともおほさは守れしきしまの道のくまてにまよふわか身を

牛山つね女か男の子をうしなひけるよしきよとふら

ひの文遣はすはしに

みとり子か乳房したひしそのかみの聲さへ耳に猶のこるらむ

明治九年の十一月より今年四十年に至るまで高木の學

校にありけるに年久しくたくへりし妻さわ子七月のは

しめつ方より腎臓の病ひにふしていたくわつらひしに

一度はいと心よくなりそめたれは長男正木をはしめ子

ともらと共によるこひあひしに八月十一日の頃より又

あつしくなりゆきて十六日の午前九時に心臓麻痺をお

こし俄に身まかりければ家こそりてかなしみつよ十七



日の午後に鹿島山になきからををさめたり其夜いもね  
られすてよめる

たくつぬのなき年月たゝへりしわかいなねとみかもなす二人ならひ居うち向ふ釜無山  
にさきにほふつゝし見るとやそめいつる紅葉見るとや學ひやの窓おしあけて朝夕にとひみ  
はるけみそこらくの子等もひたしこゝらくの人にもむつひ年まねくかたらひくらし事もな  
く月日経ぬれハ心ゆもおもはぬものをうちなひきやみこやしぬれぬは玉の夜晝おかす男の  
子らは枕へさらす女の子らはあとへさり得すいもねすてつとひさもらひ天地の神にこひの  
みいく藥あまたまたせは一度はしるしも見えてもろともそゑまひしものを千早振神もなけ  
れやいく藥しるしも絶ゆれやまたさらに病みくつほりて露霜の消ぬるかことくたつ霧の失  
するかことくつゝし花にほへる妹は紅葉はの散り過ぎにけりいはむすへせむすへしらにふ  
しあふきなけいきつき立ち走り足すりすれと乃かれえぬ道にしあれはあられふり鹿島の  
山の山みちについてたゝしぬれ今よりやなけかひ居らむあすよりやいきつき居らむえ悲しゑ  
なにものみことつゝし花咲きなむ春ももみちはのにははむ秋もいたつらに窓おしあけむす  
へのしらなく

なひかひし妹か袂は鹿島山築きこぬれの雲とたなひく

程へて後よめる

公につかへまつるとをかなとをいて入ることに事をへてはや歸りませ事なくて歸りましぬ  
と春花のゑまひふゝまひ立ち走り送り迎へし吾妹子はいつちいにけむ朝ことに出つとはす  
れと夕ことにかへるとすれとをかな門におくり迎ふる聲の聞えぬ

妻の追悼會に寄萬葉といふことを

今暫し心のとめは薦かつらもみてむ色も見せましものを

又人々より歌あまたおくらければ

さまゝにしのふ涙の時雨きて染むるもかなし薦のもみちは

妻の五十日祭の追悼會の席上にて當座の題に窓前月と

いふことを

わひ人のすめる宿とてへたてしをくもりかちなる窓の月かけ  
あけおきてともに眺めむ窓の月それもゆるさぬ秋のかなしさ

又 菌を

二人あらははにへにたにもうゑなへて秋の香こめにこもらむものを  
手向する机の代のくさひらをめてはやすらむ聲のきこえぬ

妻の追悼會に寄菊哀傷といふことを

なくさめに折らむとすれはなかゝに露おきそふるませのむら菊



同じ時紅葉留客といふことを人と共に

もみちはの赤き心は匂へともとまれる人のそでのさひしさ

又秋夜歎長といふことを

いかにして明しはてまし老にける身のとかならぬ秋のなか夜を

又煮茶といふことを

かをる香をあかすきかせむ人あらはいかにうれしきこのめならまし

母刀自の三年祭にさはることありてえ行かすなりけれ

は俄に小床つくり設けて御祭つかへ奉りける時

ほしあへぬ袂の露は三つ栗の三年経れともかはらさりけり

水害に罹りし人々を懐ふ

天の川樋口あきぬとまとふ間に家さへ身さへすてし人はも

水族館

いろくつの遊へる見ればわたつみの波の中ゆく心持こそすれ

雨中雉といふことをよめる長歌

霞よりふる春雨か春雨に霞める野へか春野焼く火はかきゝえて子をおもふと音になくきゝ  
す妻こふととよもすきゝす朝さらす露わけつゝ夕さらす雨にぬれつゝ草はにもかくろへか

ねてをちこちになきしきるなりあはれ其の鳥

葛城國一郎の結婚をいはひて

もろともに結びかためよ岩かねの鶴と龜とのなかきちきりを

岸の枯草に氷結へり

折れふして風もさわかぬ枯あしの葉末にむすふ岸のうすらひ

草枯れて野を行く狐かけあらはなり

那須の野の草はあらはに枯れしよりかくれもあへすゆく狐かな

釜無河原の朝の雨

村雨は朝とく過ぎぬ釜無の川にかゝれる虹のたかはし

寒月峯の松を照せり

夜もすから嵐にみかく音さえて月かけすこし峯の松原

落葉に霜結へり

おちつもる木のはとゝもにさそはれむものともしらて結ふ霜かな

楽しきもの

何くれと暇なき身のいとまえておもふ人とちかたりあひたる

武士太刀を佩きて行く



大八洲國を守りの太刀はきてねるや大路の武夫の伴

霜の夜車夫から車を引きゆく

月ふけて白き霜夜に大路ひく主なき車音寒けなり

捨てたるわらしに霜おけり

ぬきすてし道のわらくつさ夜ふけて絶えたる緒にも結ふ霜かな

渡米の友より文來る

あめりかの國の光りにさく花のかをりゆかしき友のことは

氷の上にならぬらか戯れ遊ぶ

うなぬらかたはふれあそふさま見れば氷の上のあやうけもなし

禁中の夜の雪

とのへもるみあかし白しひさかたの雲井の雪やいかにさやけき

五月一日關東聯合教育會にいきし折よめる歌とも

横濱の公園にて

若葉さす園のさくらのもとにきて春見ぬ花もおもひやるかな

久里濱の記念碑を見て

こは米國水師提督伯理かはしめて上陸せし所なり

いしふみのかたへにたてはいにしへにそてふきかへす久里の濱風

五月十八日甲信聯合教育會舟遊會のとき舟の中にてよ

める歌とも此時山梨縣の人々には奥石村上秀島羽田小

泉なとなりみな歌よめり

諸共に船こきいつる諏訪の湖君をまちてや波なかるらむ

奥石守卿に

いくたひか問はんと思ひし君にけふあふうれしさを何につまむ

又奥石氏に

さはりなく思ふまゝなる世なりせば日にけに君とかたりあはまし

此の日の朝まで空のけしき覺東なかりしにけふは天氣

よくなりければ

雨風も波もなこみぬまち／＼しかひあるけふの船あそひかな

小泉豆か わか甲斐のものとおもひしふしのねもすは

の海邊のなかめなりけり とそのかへし

君まちしかひはありけりすはの湖ふしの高根もともにむかへて

此の外に繪はかきをとりにてそれに歌よみてかけり



こもまくら高木の里の尾かけ松神代なからのみとりなるらむ  
ほにあげてうたへる聲も諏訪の海衣か崎にかへるふなひと  
雪白き八か嶺おろし海ふけは波の花さく花岡のさと

五月廿六日わか落合學校の裁縫室に本郷村落合村の人

人と歌のまとるせし時かねことしつゝよめる長歌短哥

魂あへる友をゆかしみ親める人をうれしみわかむかふ机の岡の學ひやのたちぬふ室に歌よ  
むと友うちつとひ文かくと筆とりもちて書く文字もいふことのはも玉とちり花とにほへり  
其の玉のかゝやくかこと其の花のかをれるか如年毎にいやたちさかへ月毎にかくしつとは  
むけふをはしめに  
學ひやの池のみきはにおりたちて言葉の玉をいさ拾ひてな

六月九日午前九時に家を出て上伊那にゆく今度は笠無

川より入笠の方についてゝゆかむとす花場にゆく道に卵

の花さけり

卯の花をわけつゝゆけは夏も猶袂によするゆきの白波

花場を過ぎて山路に入ればつゝしいたく咲けり

秋ならておれるにしきは花場山青葉にまじるつゝしなりけり

頼重水をむすひて

むすひゆく山路の水は浅けれと深くそおもふ人のむかしを

入笠あたりの太山櫻はいかにと見やるに

奥ふかく尋ねきたれと入笠の太山櫻ははや過ぎにける

鉾持神社に詣てゝ

鉾持山高くしけれほこ杉に神のみいつそあふかれにける

鉾持棧道にて

走りつゝ車行く世は鉾持山岩のかけ道あやうけもなし

三峯川の夕ぐれのけしきえもいはれず

三峯川の八十瀬の波に色はへて涼しく落つる夕日影かな

十一日に朝とく伊那町をうちたちたり箕輪の里わたり

にて

少女子かもすそぬらして朝またきとるや箕輪の里の若なへ

後山の北の方に三角點の見ゆる山あり其の名をとへは

鬼久保といふとそ鬼つゝしいたく咲きみてり

おそろしき名にはおへとも小つゝしの花の姿は鬼としもなし



明治四十一年

宮中御歌會始御題社頭松

はふりこか明くる殿戸に影さして御前の松も神さひにけり

一月一日の試筆に六十になりければ

杖つかて年をむかふる身の幸に六十の坂もやすくこえなむ

新年言志

おのつから年はかへれる天地の道にたかはぬ心ともかな

立 春

ふく風も今朝は乃とけし久かたのみそらや春のたちとなるらむ

早 春 海

浪のほに霞にほひてうらくと春をうかふる江戸の海面

萬民樂春

山はるみ野は色そひて民草の榮ゆくなへに春風そふく

や な き

うらくと春の心をくりいて霞をぬへる青柳の糸

鶯梅になけり

梅の花さくや乃とけき朝風に聲も木傳ふ枝のうくひす

野 霞

此頃は嵐もたえてうらくと昔のあら野にたつ霞かな

海原に霞たてり

煙たつ大島の根も見えわかつて霞たつなり伊豆の海原

餘 寒 月

春も猶さすかに寒し久方の月の都やさえかへるらむ

菜 花

むつれこし胡蝶とゝもに童さへ眠るすゝ菜の花盛かな

折 蕨 逢 友

ちきりおかぬ友にもあひぬ春の野のをりしるものはわらひのみかは

摘草の歸るさ孝女の墓をとふ

父母につくしゝ妹のおくつきに手向けてゆかむつみし若菜を

春流飲馬

乗る駒にいさ水かはむ鴨緑の川との氷とけわたるなり



花山を覆へり

さく花の雲こそかゝれよしの山峯も麓もたえ間なきまで

田家花

つくろはぬ田伏の庵も花さけはおもはぬ人にとはれぬるかな

花 見

さきにほふかけをとめつゝさくら花見てこそあかめちらぬ限りは

山家暮春

うき世にはしらしな花と山里のたのみむなしき春の暮かな

首夏山

うちわたす富士の高根の雪の色もうすらきそめて夏はきにけり

いつしかと霞の袖をたちかへて山も青はの衣きにけり

首夏雨

ふる雨に葉もりの神の袖ぬれて緑色そふ夏はきにけり

残櫻 詠訪家の兼題なりき

都人とひもやくると山里に春を殘せるさくらなるらむ

卯花藏宅

とひなれし伏屋はいつら卯の花の雪のみ高き夕くれの空

雨後新樹

雨すきしはいりの庭の朝日かけにほへる花は若葉なりけり

青葉に風ふきわたれり

袂にもかよひてすゝし水鳥の青葉の山をわたるあさ風

新 樹

今よりの蔭とたのまむ植ゑなへし庭のくまかしみつえさすなり

梅雨晴れむとす

けふいく日いふせかりつる心さへうすらきそめぬ五月雨の空

船中時鳥

高瀬さすさをゝたゆめてほとゝきす川のせことになきわたるなり

海邊時鳥

與謝の海内外をかけてほとゝきす松原かよふ聲きこゆなり

雨中時鳥

晴れやらぬうらみを雨の名にたてゝなくや五月のやまほとゝきす

橋時鳥



名にめてゝなれもあかすは時鳥なからの橋のなからへてまし

夕時鳥

誰か宿をとひたかへけむ夕まくれ軒はかすめてなくほとゝきす

夜時鳥

つれなさのかことはおはし時鳥老の寐覺の枕とふ夜は

風前時鳥

あやめふく風にたくひて時鳥かやか軒はをなきわたるなり

曉時鳥

棚山の曉月夜かけくらき窓とひすてゝゆくほとゝきす

峯時鳥

ほとゝきすおもひあかりてなく聲も高まの山の峯のしら雲

夏月

さそひくる風さへすゝし衣手のもりの木の間の夏のよの月

撫子露

こほさしと袖もおほふ撫子の露を尋ぬる風もありけり

夕立河をわたる

駒とめて佐野のわたりをわたせをとよはぬ先おふ夕立の雨

午睡

いにしへにいさめしことも夢なれや風を枕に猶ならふらむ

夕筵

夕風のかよふ木蔭のすかむしろ苔に重ねて夏をかたらむ

あまこひ

天の川樋口あけゝむいにしへのためしを見せよ水くまりの神

蟬聲送麥秋

色つける野への麥ふく秋風になくひてすゝし蟬のもろ聲

風生竹夜窓間臥

かよひきて夜床すゝしも竹のはや窓ふく風のふしとなるらむ

潭荷葉動是魚遊

玉なせる蓮の上の白露をこほして遊ぶ池のいろくつ

虫聲先秋

いとはやくなくなる虫か此の夕桐の一葉の音もせぬ間そ

禁庭虫



九重の御庭の秋をよひくになきてやむしのきこえあくらむ

草の花野にみたり

百草の花野のにしき色ふかし日のたてぬきのへたてなきまで

野花留客

花むしろたゝまゝをしみわかをれば月もやとれる秋の野へかな

待 雁

月清み常世の雁のわたるかとまつにむなしく夜はふけにけり

薄

なひきよるとはりと見えて御射山の穂屋のすゝきに秋風そふく

閑居秋夕

乃かれつとおもひし庵の眺にもたへさりけりな秋の夕くれ

潮みちて月いつ

播磨瀉みちくる潮の波の上に月の御船もうかひそめけり

山 月

見る人の心の色も高師山すむかけ清し秋の夜の月

聞 雁

初雁のなく聲きけは中空の秋のあはれもまさるころ哉

初紅葉

山つとにけふ折り得たる初紅葉先君にこそさゝけ奉らめ

紅葉浅

きのふけふめくるとすれとむらしくれまた下染の峯のみちは

夕日紅葉を照らせり

照りかへす夕日の色のこかるゝは空を紅葉のそむるなりけり

たにの菊

咲きいてゝ老をせくらむ谷川のなかれをとむるきしのむら菊

鐘聲送秋

消えてゆくゆめ野の秋の末の露結ひもとめぬ鐘の音かな

霜雪に似たり

ふきあれし嵐の末におく霜をはたらにふれる雪かとそ見し

冬 山

さひしくも見えわたるかな山のはに咲きちる雪の花はにほへと

里 初冬



ふく風に木のはも雨も音たてゝふり行く里に冬は來にけり

垣 霜

百草の匂ひし垣は色あせて霜の花こそさまかはりけれ

雪中會友

まち得つる都の友はかへさしと雪さへ高くふりつもるらむ

雪中懷人

かきこもる人やいかにとあともなき雪の山路をおもひやるかな

積 雪

ふるか上にふり積るらしさ夜ふけて耳にこたふる雪折の聲

朝 初 雪

おきいてゝ見ればさやけし夜の間の夢にあはする今朝の初雪

峯 初 雪

初瀬山峯の檜原を見わたせは木むらに白し今朝の初雪

深 雪

大口の眞神友よふ聲すらに今はたたえぬ雪の山みち

名 所 雪

春秋の花に紅葉にしのかたよしの龍田の雪のあけほ乃

水 亡

車よりとくもゆくかな諏訪の湖水の上に道つくりして

鷹 狩

天の川雪のふる道ふみわけてかるや交野の末のたか人

御代のすさひ四編のはしに

榮えゆく御代のすさひのことはを山ともなれとかきそあつむる

旭日照浪

朝日子のひかりあまねき御かけにはたちゐにもるゝ浪なかりけり

朝

忘れしとおきてそ思ふちりもぬ淨きあしたの心はかりは

埴 輪

いにしへの埴輪を見ればねになきし聲ものこれる心持こそすれ

讀書有感

濱千鳥あともめすは書の上にあるしむかしの聲をきかめや

相 撲



くゑ速をなけてきたためしむかしより絶えぬ相撲の業そをゝしき

烟

物多に満ち足はせる御代とてや烟にきはふ四方の國原

八頭の大蛇

ゆひたてし八つのさすきに睡る間の夢やつるきの風に覺めけむ

水 郷

夕けむりなひくあたりに船とめてむかしやとはむ宇治の橋姫

忍岡懐古

岡の名にかけてもたれか五月雨のふりしむかしを忍はさらめや

高嶋懐古 詠訪家歌會の當座題なり

高嶋の城の上にては太刀はきて守りしむかしおもほゆるかも

樵歌入山

うたひつゝわけ入る賤か樂しさを雲にこたふる山彦の聲

松島艦の沈没せりときよて

おもひやる袖さへぬれぬ松島やしつみし船のあとのしら浪

藥

藥てふ藥はあれと心ゆく月と花とそいく藥なる

隣 家

あしかきの一重にものゝ親しきは心へたてぬとなりなりけり

自働軍

まかねちも駒も頼まておもふとち心のまゝにやる車かな

歌舞伎座

なそへつゝすることわさの手ふりより歌舞伎としもや名つけそめけん

觀 劇

しらぬ世の人の手ふりをめの前に見れば涙もさしくまれけり

塚上苔

尋ねきてむかしをとへは古塚の苔路の露そこたへかほなる

本能寺

あた波のよすとしりせはたゝへてし御寺の溝はにこささらまし

陸軍大演習

皇軍のいくさならはすけふしもそ動かぬ國のみたてたつらし

軍 人



を、しかるむかしのまゝに傳へきて今も榮ゆる物部のみち

藤原公任

三つの船乗りおくれてももみちはの色のにほひはおくれさりけり

那須宗高

乗りいてし駒をしつめてはなつ矢のひゝき身にしむ波の上かな

ある人繪はかきに贅せよといひければ即よみてかける

歌 大楠公を

君ならてたれかこたへむ笠置山松ふく風の高きしらへに

菊地武光のかたに

筑後川太刀を洗ひしものゝふの血しほはよゝに猶なかれけり

調伊企難のかたに

ゐさらひをこきしなめよとをたけひてうちし音こそ世にひゝきけれ

高山正之のかたに

はしの上に袖をりしきて大宮を仰くも高し君か誠は

織田信長のかたに

大みことうけすはいかてあらをたを織田の田長もすきはかへさし

河野通有のかたに

あたともをうちきためしの神風のふくほはしらをはしたてにして

騎兵のかたに

千里ゆく駒にまかせて軍人あたのしわさを先やしるらむ

工兵のかたに

飛弾工たくみこらしてぬは玉の一夜のほとにわたす船はし

砲兵のかたに

うちいたすひゝきと共にくつるゝやあたたなふあたのとりてなるらむ

機關兵のかたに

とりなれし此の兵のなかりせは大きみふねもいかてこかまし

親切とあるかたに

今はとてつゝむにあまる涙にそ人の誠はあらはれにける

勇戦とあるかたに

とりてをは今こそ得つれ大空もとよむはかりの萬世の聲

豊橋の人河田直武か一年祭に寄花懷舊といふことを

去年の春さそひし風のうらみさへかこつもあやな花の下かけ



葛城國一郎の父身まかりけるよしきよととふらひにつ

かはすとて 三月のころなりき

ふれはかつ消えゆく春の雪よりもろきは人の命なりけり

米澤葛城二人の母と父との追悼會に寄梅哀傷といふこ

とを

と、めあへすこほるゝものは梅の花たむくる袖のにほひのみかは

又雨中鶯といふことを

ふる雨にぬれつゝ來なく鶯の涙や袖の露をそふらむ

海軍中尉石城尙二の病死せるをきよととふらひに遣は

すとて

かくはかり堪えぬ歎きにしつまめや常なき風のなき世なりせは

佐伯類之助の追悼會に寄風哀悼

いつはあれとなき人しのふをりしもそ空ふく風も身にはしみける

窪田正徳の母の追悼會に寄糸哀悼

玉の緒のなかかれとのみおもひこしいともはかなくなりけるかな

父の命の追悼會を人々いとなまれける折寄笛哀悼を

をりくゝにすさひ給ひし笛の音を今一度のきくよしも哉

右人々の追悼會を一度にいとなみけるをり當座によめ

る歌ともの中寄水懷舊を

なき人に汲みてさゝけしみたらしの水も氷になりけるかな

又寄千鳥懷舊を

なき人をしのふの里の小夜千鳥涙なそへそぬるゝ袂に

周防國人吉岡式一か還曆の賀に

もろ共に若えつゝ經むいかしよのこのいつ御代をうたひかはして

備後國人田中清兵衛か還曆の賀に寄松祝といふことを

色かへぬ操の松の若みとり若えゆくらむ程そしられぬ

長野市の人松澤龍の祖母の八十賀に

枝も葉もとはに榮えむ影高き八ひろの松のいやひろにして

肥後國球磨郡水上村盛山尉藏の七十賀に寄菊祝を

老をせくその水上にさきいてゝ菊も稀なる年にあふらむ

神戸の人杉山利介の還曆のいはひに寄山祝

たちかへりいく世めつらむ諏訪山の尾上の春のあかぬなかめを



高島小學校の新築落成をいはひてよめる長歌

みさこゐる洲羽の郡の高嶋の里の眞ほらに百千足る家にはもしるき高しまの學ひのにはに  
つきたてし眞木の柱は動きなき心のしつめとりあけしむ年うつはりはたくましましきむくろの  
かためとゝのへる木組たくみは百千々のさとりのはやし今ゆ後いや年の毎に人多に成いり  
つとひてまな柱學ひをへつゝをゝしかる男の子やいてむ眞くはしき處女やいてむたゝはし  
き名も高嶋の大きいさをそ

金葉集を見終れる二月一日の夜その集より題をとり出

てゝ五十首詠しける其の歌の中

春十二の中

初 春

谷川にかけし氷の橋柱くつるや春のはしめなるらむ

初 聞 鶯

雪消ゆる垣ねの梅をはしめにて春つけわたる鶯の聲

霞

梓弓いるさの山の春霞ふもとをかけてたなひきにけり

柳糸隨風

あらそはぬ心も見えて吹く風のまに／＼なひく青柳の糸

呼 子 鳥

呼子鳥聲をかきりによはへとも糸麻の山のくる人そなき

霞中 歸 雁

聲のみを空に乃こしてかへる雁かくれもゆくかたてる霞に

花 爲 春 友

春毎にかはらぬ友はかくはしく匂ひ出てぬるさくらなりけり

落 花 滿 庭

いと早もしらみにけりな庭もせにちりつむ花の雪のあけほ乃

春 田

結ひてし氷も雪もうちとけてひまなくかへす春の小山田

橋 上 藤 花

藤なみの花こそかゝれかきはきて人まつやとの池の棚はし

夏七の中

卯 花 連 垣

垣つゝき心してゆへ卯の花の雪のしら波よせもこそせめ



待時鳥

聞くまてはおき明さまし時鳥待兼山の名をは忘れて

曉開時鳥

寐覺とふならひなりせは時鳥曉ことにおきてきかまし

盧橋

風にたにむかししのへと御陸への花たち花の香をはふくらむ

水風晚涼

夕されは涼しかりけり衣川そてによせくる風と波とは

秋十二の中

野菜帯露

眞葛はふ野のへの露はわひ人の秋をかなしふ涙なるらむ

菘

御射山の祭は過ぎて露しけき穗屋の軒はにきりくすなく

萩

紫のゆかりの色に咲きしより露もあやあるまのゝはき原

閑見月

蓬生の露とおきゐて月見れはかけにもちりはかゝらさりけり

秋月如畫

天地にみち足はせる秋の月いつこかよるのさかひなるらむ

月照古橋

苔むして人も通はぬ石橋を夜すから月のすみわたるらむ

夜聞鹿聲

さよふけてきけはかなしな秋風のたつたの山のさをしかの聲

河霧

よひまとふ舟子の聲は聞ゆれと八十瀬はわかぬ宇治の川霧

深山紅葉

きのふけふ時雨ふるなり奥山のはゝそのもみち今かそむらむ

冬七の中

時雨

まきの戸を明ぬ暮れぬと神無月時雨のあめのふらぬ日そなき

橋上初雪

おきわたす霜かと見えてかつらきや条路の橋にふれる初雪



雪

大木曾や小木曾は寒し群山の峯も麓も雪深くして

月照綱代

もりあかす袖いかならむ綱代木にかゝれる月の影の寒けさ

戀六の中

寄石戀

おもふともいはぬものからさゝれ石の數々ものやかなしかるらむ

寄花戀

花ならはかさしてたにも見てましを人の心のをられやはする

寄山戀

淺間山淺き心を頼まねはむねのけふりのたゆる間そなき

雜六の中

水車

早き瀬に身をはまかせて水車やむ時しらぬ我や例なり

述懷

外つ國にゆきかふ人の數にたに入りなはいかにうれしからまし

山家

なか／＼に都のことを思はずは山里のみやすみよからまし

新古今集を見る頃友とち一人とひ來にければ其の

集より五十の題をとりて午前九時半よりはしめて午後

四時の頃よみをへぬ三月三十日のこと也

春十二の中

立春

ほの／＼と霞の衣たちそめし富士の根よりや春はきぬらむ

餘寒

とけそめし山澤川もさえかへり岩間の氷又むすふなり

關路鶯

關守はすますなりても箱根山なほ鶯は人をとめけり

晚霞

難波江やこやのわたりの夕霞乃のとけき春を空にしるかな

梅花遠蕪

いひしらすかをれる梅は眞柴垣いく重越えこし匂ひなるらむ



閑中春雨

春雨の霞める軒は音もなく心のとけきよもきふのやと

春曙

乃とけさも類なきかなたちこめし霞の奥の春のあけほの

故郷花

残りなくうつりはてにしけふなれと花はむかしの志賀の故郷

月入花灘晴

ちる花も月と共にや流れけむゆくせも見えぬ丹生の柚川

水郷春望

難波江やつのくむ茅のめもはるに霞わたれる茅のやの里

夏七の中

待客開時鳥

こぬ人をまつの戸ほその明暮になくさめてなくほととぎすかな

海邊時鳥

此の頃は聲も高師の浦なれて波にあらそふほととぎすかな

雨中木繁

かけくらし窓はとちよとふる雨も葉廣かしはもしけき頃かな

瞿麥露濕

置く露の重みに見ゆる撫子のあはれもふかきませのうちかな

夕顔

なつかしと誰か見さらむ夕かけにさく夕良の花のよ所めは

水邊涼自秋

夏箕川波吹き送るすゝしさは秋にしられぬ袖の夕風

秋十二の中

山家早秋

山里の杉の板戸をふく風や秋のあはれのはしめなるらむ

朝草花

いろ／＼における千草の花の露朝めやつさぬ秋の色かな

萩

わひ人のあはれも深き秋なるを心あらなむ萩の上風

野草露濕

草の葉にしからむ露のしけゝれは過ぎもやられぬ野邊の通路



雲間瀬月

雲間よりもるとはかりは見る月のてらしもあへぬ影のはるけさ

河霧

武夫の八十瀬の波をたちこめてあやめもわかぬ宇治の川霧

擗衣

秋しのや外山のきぬた響き来てうたぬ袖にも秋風そふく

田家秋興

つゝみうつ田伏せの庵の賑ひはとしある御代のすさひなるらむ

紅葉透霧

たつ霧に紅葉をこめて山姫やうら紅の衣おるらむ

冬七の中

旅宿時雨

とひすてゝいく度夢を覺すかと時雨にかこつ旅やとりかな

橋上霜

さよふかくおく霜白き板橋をふみしたきゆく音の寒けさ

湖上冬月

諏訪の湖水の上の雪はふるあらしにくもる冬の夜の月

野亭雪

野つかさの松のあらしもうつもれて音なき雪に道はたえにき

埋火

いく度かかきおこしても残る夜を猶かこたるゝ埋火のもと

海邊歳暮

松浦かたまたぬにこゆる年波をかへしもあへすくれはてにけり

戀六の中

春戀

春されははつかにもゆる若草のまたうら若き戀もするかな

冬戀

草も木もあらはになれる冬枯のかれくにとふ君そつれなき

曉戀

曉とつけの小櫛もとらぬ間にはやきぬくになるかかなしさ

寄風戀

吹きかはるものとしりつゝおのか身を風にはいかてまかせそめけむ



寄雲戀

鳥籠の山たなひきこめしあま雲のはるけしきも見えぬ君かな

雜六の中

閑居

人とはぬ我かかくれかは松風のまつとしもなき音のしつけさ

山家嵐

さひしさも馴るれば馴れて事もなし嵐にくるゝ太山への里

懷舊

入りそめし淺香の山は淺くとも戀しきものは昔なりけり

河水久澄

五十鈴川にこらぬ水を例にてすみゆく御代は萬世までに

詞花集を見る頃其の集より題五十をとり出てよめる

春十二の中

立春

吹きかはる風そ乃とけきよしの山雪の上にも春やたつら舞

春來ぬと賤機山のたてぬきに糸おりはへて霞む頃かな

聞鶯

春の日のうらゝになりし此の頃は朝いゆるさぬ鶯の聲

故郷柳

故郷にわか來て見れば昔見しはいりの柳もえいてにけり

澤邊春駒

澤水にうつれるかけを友と見てはなれもやらぬ岸の春駒

見花

物おもはて花見る時はおのつから心も花になりぬへきかな

落花

雪とふる花の木かけに休らへは袂も寒き心ちこそすれ

歸雁

けふくと人はまつよにさく花をおもひすてもかへるかりかね

夏七の中

菖蒲

ふきそへしやとの菖蒲に玉のこと結ふ露さへうれしかりけり

萬葉集



閑中時鳥

世はなれし宿をはなれも知りかほにかたはひくらすほととぎすかな

螢

風たちし青田の面を見わたせば螢とふなりしとろもとろに

水邊納涼

水の面をふきくる風のすゝしさにさをもさゝれぬ納涼舟かな

秋十二の中

野草花

はてもなき秋の廣野の末かけてにしきをしける百草の花

露

くぬき原朝たつ風にはらくとこほれて清し露の白玉

見月

秋の夜の月見ることにかゝれともおもふは人の心なりけり

月浮山水

瀬を早みゆくとはすれとすむ月のかけは流さぬ山川の水

霧

うちよする波の中ゆく心持して夕霧ふかしうつ山こえ

月照菊花

うつろはて千世もかをれと菊の花よを長月の月てらすら舞

紅葉

故郷に歸らは着よと歸る山紅葉のにしきおりてかくら舞

暮秋

風早み時雨とゝもにかきくらし紅葉ちりゆく秋のくれかな

冬七の中

冬月

霜なひく風さへ氷る冬の夜の月かけ寒し御射山の原

初雪

世の常のものとはは見む我か宿の垣根はたらにふれる初雪

雪後眺望

うちわたすかきりは雪の色はえて朝日まはゆき武蔵野の原

鷹狩

雪交り風ふきすさふ御狩野の鳥たちひまなき夕ぐれ空



歳 暮

おこたりの積れる身には今はとてをしむひまなき年のくれかな

戀六の中

恨 戀

恨みてもかひもなみ間の捨小舟になかゝにおもひかけゝむ

後 朝 戀

これをたになくさめつまときぬゝの別れの涙つゝみてそこし

等 思 兩 人

かたゝに心はよせし小車のもろわに人をおもひそめては

雜六の中

水 草 隔 舟

葦のはや何へたつらむ難波人こくなる船の音を殘して

海 上 遠 望

伊豆の海沖ゆく船のけふりより外に物なき朝ほらけかな

述 懷

大御代になからへ居れはいたつらに老い行く身ともなけかれぬかな

八月十七日に萬葉社の月次歌會の折當座にとて五十首

詠せし時の歌とも

春十二の中

雪 中 鶯

降る雪をおのか羽風に匂はせて花と見よとや鶯のなく

橋 邊 霞

うちわたすほとも乃とけしほのゝと霞にあくる瀬田の唐橋

行 路 梅

あつつかは人やとかめむしかりとて折らてやむへき野路の梅かは

春 月

ひさかたの天の八ちまたわけかねて霞にやとる春の夜の月

岸 柳

里川の岸の細道春ゆけは袖ひきとむる青柳の糸

遠 歸 雁

かへりゆく雲井の雁は餘波思ふ遠方人のこゝちこそすれ

關 花



ふかぬ間に花こそは見め關の名のなこそと風もたのまれぬよは

河 秋 冬

山吹の露そふ頃はかち人もたゞには過ぎぬ井手の玉川

夏七の中

社頭卯花

神祭る里の社の垣根には先卯の花そゆふかけてける

早 苗

むかもゝにひちかきよせてむかしよりとるや少女のみ田の若苗

阿時鳥

いにしへをなれも忍ふの岡なれてなく時鳥あはれとそきく

夜 廬 橋

たちはなのかをりわたりていにしへの人なつかしき夜はにもあるかな

籬 置 麥

なてしこの花さく時はませかきの内にしのはむ風もゆるさし

江 螢

みたれちる星かとそ見るみしま江のにもふす螢空に飛ふ夜は

秋十二の中

萩 露

おけはちるおのかならひを萩かねにもろくも見する今朝の露かな

萩 風

うき秋を知らせかほにもふく風は萩のはよりやそよきそむらむ

野 徑 月

さ夜深くゆきかふ人の影たえて月こそすめれ野邊の細道

船 中 月

風なきて波もさわかぬわたつ海の沖こく舟にすめる月かな

掛 衣 幽

夢覺めてきゝさたむれは現にもきぬたうつなる音のはるけさ

夕 紅 葉

露時雨過きての後の夕かけにはえて色こき峯のもみちは

暮 秋

もみちはを折りてかさして惜むともしらてや秋のくれてゆくら舞

冬 七



朝時雨

けふも又たひく過ぎむあらましを朝より見するむら時雨かな

竹霜

風さえむよはのけしきを先見せて夕霜さやく竹の一むら

池水鳥

波の上に遠き昔のあとめて千鳥そかよふ淡路島やま

松雪

琴の音にかよひし松のしらへをもうつみはてたる今朝の雪かな

湖雪

白雪は氷の上につもるともしるやしらすや諏訪の湖

惜歳暮

身につもる年は忘れて過ぎなましをしきはおのかおこたりにして

戀六の中

寄雲戀

天つ空なかめてそ経る久かたの雲のよ所なる人をこふとて

寄露戀

人の上に秋風たちて白露のおき所なき身をいかにせむ

寄草戀

生ひぬとも老鶯の杜の下草はかる人なしになりやしなまし

寄鳥戀

おもはぬを猶おもふとてぬえ鳥の乃とよひしつゝこふる頃かな

雜六の中

曉述懷

曉の鐘のひゝきを身にしめておもふはけふのつとめなりけり

海旅

沖遠くこきはなれては大船のたのみもふかくなれる旅かな

寄松祝

萬世もかはらぬ松のかけにゐて御代をときはといはひまつらむ

明治四十一年

今年は日課に歌をよみ試みむとおもひおこしに遂に

よみ遂げければはかなき言の葉なから後の思ひ出にと



て書つく

一月二日 年毎にけふ葛木の人々をとひて年禮せしか

今年は叔母君の喪にこもりければ

こもりゐて袖こそしほれ年ほきにとふへき人のある身なからに

三日 正木を伴ひて鹽澤温泉にゆきける時

寒しとも覺えさりけり鹽澤の谷ふく風ははけしかれとも

六日 書生の人々東京に行くとして暇こひに來に

ければ

さくあれとそふることはの一ふしをうき世のたけとおもはさらなむ

七日 久しく雪のふらさりけるにけふ少しふりけ

れば

我れのみか人もまちける雪なれとおもふまゝにはつもらさりけり

九日 陛下の最近の 御製なりとして新聞にあるを

うつし奉りて

筆とりてかくもかしこし大君の大みことはのはなのほひを

十日 米澤氏來て正木と二人にて雪二十五首をよ

めりとて見せられければ

わか宿に雪はふらねとことのはの花のひかりのさゆるけふかな

十一日 けふは風なきていとあたゝかなりければけ

しきたてる心ちす

春はまた遠山鳥の尾の上のみ霞みそめつと見ゆるけふかな

十二日 けふは妻の百五十日にあたりければ

ありし世に妹かきせたる冬衣百日五十日まではやたちけり

十五日 富士見の停車場にゆく道すから雪のふりい

てければ

風早き雲のみをよりこほれきてたまりもあへぬ袖のしら雪

十六日 信陽館にやとりける夜

つみあけて籠れる賤かわらやより寒きは壁のすき間なりけり

十七日 上諏訪よりかへるさ富士見の原路にて

かへるさの道そあれたる富士見原風と雪とにまかせてし間に

十八日 神代にて

釜無の河原路くれはふきおろす嵐にさわくきしの竹むら



二十日 今年卒業すへき兒童等と共に寫眞をとるとて

すなほなる人の面わをうつし繪に後の世かけて見むとなりけり

廿一日 烏帽子にのほるとて

吹きおろす風寒けれと寒しとも知らてそのほる里の坂路

廿三日 大日本美術史に奈良朝の頃の筆のあとよも

あけつらへるを見て

みやひをのむかしの筆のあとかたりおもひあはすることそ多かる

廿四日 北海道の正孝より昆布魚なと贈りおこせけ

れは子らに

なき母の御靈の前にさゝけてよ先贈りこしひろめいさなを

廿五日 人にあとらへられて筆とりけるをり

筆とりても書く毎に耻しとおもふは文字の姿なりけり

廿六日 余か畧傳を正木か物せるを見て

いたつらに年をつみつる汝か父に一世のほとをならはさらなむ

廿七日 獅子の子をはくゝむかたに

いけるものとりはむ獅子も子をおもふ心はかりはかはらさりけり

廿八日 女子補習生に物をしへせるをり

うら若き處女かともいそしみて學へる見れは樂しかりけり

三十一日 よへより雪ふりけるに朝には雨となりければ

ふりつみし雪かきけちて山畑の若菜いそけと雨はふるらむ

二月三日 平岡の里の談話會にゆきてかへるさ

釜無の夕山おろしふきおちて衣手寒し平岡のさと

四日 けふは節分なりとて宵の程は鬼やらひの聲

のみきこゆ

鬼やらふ聲聞ゆなりまちらひし春の日かけや程なかるらむ

六日 けふは立春なるにかへりて風寒かりければ

重ねきる衣の袖に風さえて春たつけふそ春としもなき

七日 神代わたりにて富士の夕景をなかめわたして

雪の色を薄紅にそめいてゝ夕日をのこす富士の大たけ

八日 けふ瀬澤新田に物して

岩とこと氷りし道の上とけてわたるもゆるし春のはつ風

又かへるさに



八かをの雪解にくもる雲間よりおろす嵐そ春としもなき

十日 釜無河原のほとりにて

釜無の川邊傳ひに見わたせば霞そめたり富士の遠山

十一日 紀元節に

あふけたゝ動かぬ國の御柱をおしたてましくけふのよき日を

十四日 釜無河原にて

きのふまで風ふきさえし釜無の河原もけふはかすみそめけり

十六日 こま澤にいきける時

道のへの岩ねの氷とけそめて苔のしつくの音聞ゆなり

二十日 机の父兄懇話會に物せし時

をしへおく聖の道もたとらすは草葉における露とけなまし

二十一日 朝とく富士見の停車場にゆくとて

つれなさを残さしとてや明けわたる空に消えゆく有明の月

二十三日 富士見の油屋にやとりける時

ゆきくれてやとり尋ぬる時にこそわか知る人とおもひいてけれ

二十五日 雪はとけなから身に寒く覺えければ

道のへの岩間の水は音すれと雪けにくもる空を寒けき

二十六日 徳川家康か佐竹氏は上杉氏より憎むへしと

いへりけるを

なひかする方になひける竹よりも直なる杉を君はめてけむ

三月一日 けふ鹽澤の温泉あみてんとて雪わけていき

けり

ふみわけて雪の谷道たとれともさすかに春の色はありけり

二日 道のへの露の見えそめければ

道のへのふきの若菜はもえいてぬなく鶯やほとなかるらむ

四日 ひねもす雪ふりければ雪くつをはきて少女

らまていさましく學校にゆきまするを見て

わらくつをうなる少女もはきつれて雪のふる道わけそゆくなる

五日 雪きえて道あしかり

處せき雪けの水のなかれきて馴れぬる道も越えわひにけり

九日 ことに寒くて雪を

いと高くふりつもりたる春の雪とけむともせずさえわたるなり



十一日 風あれて雪をふきたてければ

ふりしきし雪をふきまき追風にまかせて歸る身こそはやけれ

十二日 晴れたれと風あらくふりおける雪をふきたつ

窓たゞく嵐に雪をふきませて春としもなききのふけふかな

十三日 窓の月あかけれといとさえわたりければ

火によりてまた春籠るころとてや窓とふ月のさえわたるらむ

十四日 兒童らか作りし雪の山の更に低くならさり

けるを

うなるらか作りすさひし雪の山とけむともせぬ春の寒けさ

十五日 家に歌のまとあり

いくそたひ集ひあひてもあかれぬは歌よむときのまとるなりけり

十六日 ふりつもれる雪消えそめて若菜見えそめたり

消えわたる雪の下水おちあひて濁れる澤に若菜をそつむ

十八日 雪の朝よりいたくふりけるにたまらさりけ

れは

玉なせる雫となりてふる雪も春は梢にたまらさりけり

廿一日 鹽澤のいてゆあみせり

来て見れば雪の岩戸をさしこめてまたあけやらす谷の鶯

廿二日 机より歸るさいと春めきたれば

わか向ふ富士の高根の霞よりにほひそめたり袖の春風

廿四日 兒童の及落いよく定まれるとき

さまくゝに思へとえこそかひなけれ進む進まぬ所しかはれは

廿五日 兒童に證書を授與しておもふことを

とりくゝに嬉しさ見するうなるらかゑみのおもわのうるはしきかな

廿八日 釜無川にて

なかれゆく音をもこむる山川の水にかけてかすむ春哉

廿九日 母澤にて鶯をきゝたり

大母や小母の澤をゆく水になかれて清し鶯の聲

三十一日 職員會して亂れたることゝも直さむとて

数々ことはかりける時

正しかる道の奥處をおもふよに曲りやすきは人の心か

四月二日 上葛木の東裏の方にてしきりに鶯のなくを



きよて

もえいつる茶をもつめとや鶯はこもれる人をさそひかほなる

四日 寶秀の葬儀に物せしに雨ふりければ

ふりくらす雨は涙か人みな袖ももすそもぬれそほちつゝ

五日 けふも一日雨ふりくらせり

文見れど眠りかちにてつれくの春のなかめに一日くらしつ

七日 賤の田畑に見えそめければ

賤の男か歛とりつれて田に畑にいそはく見れば春めきにけり

又小池竹翁か思はぬにとひきければ

はふとしも思はさりつるわかやとにいとめつらしき鶯の聲

八日 三河武士といへることを

うみつちの三河をのこのをゝしさは磯こす浪も及はさりけり

十一日 朝ことに鶯のなくをきよて

朝なくなく鶯の聲きけは一日くくに春めきにけり

十二日 米澤葛城二人の追悼歌會の人々をまちわた

りて

人々はなとおくるらむおくれしとくりかへしても契りしものを

十四日 けふも雨ふりければ

春雨は猶はれやらぬ此の岡に若草のみはもえ増りつゝ

十七日 學校の池のほとりの柳をよめる

そめいてし池の汀の糸柳みとりの色に春風のふく

十八日 童の櫻かさしてゆくを見て

さきにほふ櫻かさしてゆく子らかゑみのおもわのうるはしきかな

二十日 神代の里の櫻さきそめたるを見て

靈幸ふ神代の里の山さくらむかしの色にほひぬるかな

二十一日 賤のをか櫻かさしてゆくにいつくの花かと

とひてさてよめる

こと問へと賤はすけなしなかくにかさせる花をゑみてこたふる

廿三日 夕暮に學校の池の邊の柳を見て

山の端に夕日は落ちて青柳の枝にのこれる池の春風

廿五日 心持そこなひてふせりければ

たれこめて一日見ぬ間に垣内なる草はみとりにもえいてにけり



廿六日 矢崎久子来て物語りす

糸水の軒はにかゝる春雨を心にしめてかたる静けさ

廿八日 平岡にて苗代つくり居るをはしめて見て

むかもゝにひちかきたれて賤のをか苗代つくる時は來にけり

五月一日 岩かけに山吹のうるはしくさけるを見て

道たえて人も通はぬ岩かけにこぼれてにほふ山吹の花

二日 童らと釜無河の堤に眞砂つみし時よめる

いく千世と數へあひても釜無のつゝみの眞砂つきせさりけり

四日 神戸わたりの桃の花盛りなり汽車の窓より

うちなかめて

小車の窓をとらして桃の花紅深くにほふころかな

六日 大角豆夏大根の種蒔きして

種まけははやまちわたる心かな大角豆すくゝしろいつか生ひむと

七日 山川の岸の山吹を見て

影うつす峯の山吹風こえて下ゆく水に露こぼるなり

八日 西浦にて

夕月の影のをくらき垣つ田の苗代水に蛙なくなり

十一日 富士見の停車場にて樋口氏にゆくりなくあ

ひてわかるとて

ゆくりなくあひぬとおもへと一時の語る間もなくわかぬるかな

十三日 惟盛のことゝも記しゝものを見て

おもひあまり遠き神代のあとゝめて熊野の海の波に入りけむ

十五日 富士見の油屋にやとりける朝

緑なす野路の芝生に霜氷り富士見の夏はさえかへりつゝ

十六日 乙事の教育會にゆきける道すから

若葉さすくぬ木林の下つゝしもゆるはかりにさきいてにけり

十七日 歌會せむと立澤わたりの人々と契りけるに

雨いたくふりければいかゝと思ひしに來に

ければ

雨ふれはいかゝと思ひわつらひし事をはたせるけふのうれしさ

十八日 風はけしくて帽子なとふきとられ折々立ち

とまりて



けふことに通ひなれたる道なれと嵐をいたみゆきそわつらふ

十九日 學校にて時鳥をはじめてきよぬ

ほととぎす待たぬに來なく聲きよていとまなき身の程そしらるゝ

二十日 杉の苗をうゑたる學林を見めぐりて

つきたてし門はなけれどうゑおきし杉のたち枝にしめやさゝまし

廿一日 萬木の分教場を見て

うなゐらか學へるさまを見る毎におもふは直き心なりけり

廿二日 棚山の時鳥の聲をきよて

水鳥の青葉茂れる棚山になくほととぎす聲のかそけき

廿三日 高嶋公園の藤の花を見て

高嶋やよせくる海の波ならて軒のつまこす藤なみの花

廿四日 きふ先登にまうて牡丹を手向くる折

深見草手に折りもちて手向くれは葉末の露そ袖にこぼるゝ

廿六日 鹽澤にあみて木の芽つむ折しも向ひの山の

藤の花つゝしなとの咲けるを見て

夏山にさきて匂へる紫も赤もみとりのあやとこそなれ

廿七日 新渡戸ぬしの武士道といへる書を見て

とつ國の人そうらやむ日の本の國につたへし武士の道

廿八日 けふは休なれば職員うちつれて黒嶺に登り

ぬ朝の間雨ふらむとて人々さわく

久方の天つ御空そ定まらぬ人の心もはれみくもりみ

小黒嶺わたりにて

花と見て折らむとすれば奥山のならの若葉に袖そぬれぬる

大黒嶺の麓にておくれたる人々をまちて

おくれたる人やくるらむたちまよふ雲間に見ゆる三島菅笠

爪皮水にて火焚き出て獨活葉葉など焚つゝ

酒あたゝめなとして

仙人の住家に来つとおもふ間にわか袖はらふ峯の白雲

廿九日 時鳥をきよて

寐覺して聞くもさやけし棚山の曉ふかなくなりほととぎす

三十日 賤のをか蒞しきといふものをかるさまを見て

時來ぬと駒ひきつれてうたひつゝ眞柴かるをの聲きこゆなり



六月一日 農夫のいそかはしきさまを見て

賤の男かいそはく見れば早苗草うゝへき時は近づきにけり

二日 壯丁の學力しけむといふことを行ひて

とりくくにするわさ見ればをの子らの心々も見えわたるかな

四日 五人にて黒嶺にもものとりにとていてたつ大

久保わたりにて

一曲は一曲ことに里見えていよく高し久保のやまみち

うしろくらといふ所にて藤の花を見て

紫のゆかりもとめてやとらはや青葉の中の藤の下かけ

同時時富士見か池にて

家居して見はやとそ思ふ類なき山と水とのあかぬなかめを

五日 神代の里の石灰やくかまわたりにて

道のへの石やくけふりなひきゝていくその人か香にむすふら舞

六日 家にて歌のまとむせし時歌かたりして

いにしへをしのへは高しおもふとちまとゐしつゝも歌かたりして

七日 文章の解剖といふことをして

かけしけき文の林にわけ入れはにほふ色香のさまくくにして

九日 祖母君母君の忌日なれば草の餅つくりて奉

るとて

うつくしみあつきみおやをしのひつゝ草の餅をけふたてまつる

十日 庭にうゑたる卵の花のさけるを見て

雪かとして驚かされぬ木のもとにおのかうゑたる庭の卵の花

十一日 入梅なりときゝて

いふせかるけふをはしめにさみたれはいつまてはれぬおもひするらむ

十二日 雨ふる日つはくらめの巢にかよふさまを見て

ふる雨に尾羽かきたりてつはくらめはれぬ軒はをとひわたるなり

十三日 露國忠魂碑の除幕式をへぬときゝて

かゝなきであれたるわしの餘波さへすてもたまはぬ君か御代かな

十四日 藤重より文來つ例の歌ありければ

歌かきし文見るたひにあめりかの遠き島根にゆく心かな

十五日 ふきつみてむと人に契りたれと天氣のさま

あしければとかくしつゝ



わけ入らむ夏の山邊をたちこめてふると定めぬ五月雨の空

十六日 竹翁かまつといひおこせければ

暇なみとはぬをしらてふる雨にさはれりけりと友やおもはむ

十八日 小池竹翁とかねて契りおきけるかさばる事

のみ多くてえいかさりける程に文して驚か

しおこせければいてやとて立澤にいてたち

ぬ翁やとにあり即よめる

しけりあふ青葉のかけにかたらへはあつさも何も忘れはてけり

仙人のほらおもほゆるやとなれば酒も木の芽も世に似さりけり

竹翁の孫祐治によみて與へたる

天地に類もあらぬふしの根の姿を人のこゝろともかな

十九日 竹翁といとまつてかへらむとする時

立場川々邊傳ひにゆくくもかへり見かちにわれやかへらむ

二十日 田をうゝることさかりなり

早苗草時過さしと賤の女もうたひつれてや山田うゝらむ

二十二日 うゑわたしたる草苗に風ふきわたれり

うゑはてし早苗に見れはまたきよりたつ秋風の心地こそすれ

二十四日 富士をなかめて

さみたれの雲は麓にたゝよひてみ空に高く晴るゝふしの根

二十五日 又くもりて雨ふりいてぬ

はれゆきし軒の八重雲かへり来て又袖ぬらす五月雨のそら

二十六日 人の心のふるはさりし頗なる神の音をきゝて

ぬふりゆく人の心を鳴る神は覺めよと空にとゝろきぬらむ

廿七日 雨ふるに植物採集の人々釜無山に登りけれ

は峯をなかめて

うちつれて登りゆきけむ増荒雄かあたりにかゝる峯のしら雲

七月一日 古屋わたりにて五月雨ふりしきる頃

五月雨のふるやあかたにたつ雲を石やくかまのけふりとそ見し

二日 よしきりといふ鳥の柳になけるをきゝて

賤の男に葦はかられて川のへの柳にうつるよしきりの聲

三日 雨はれたる田の面を見わたして

五月雨の晴るゝ田面を見わたせば稲はの緑色をそへけり



四日 学校の庭の植木のかげ高くなりければ

かけ高くなりけるかな諸共にきのふかうゑし庭の木立も

六日 曇りかちなるころ

けふ幾日ふりみふらすみ過しきぬいつまで晴れぬみ空なるらむ

八日 正木か茄子をうゝるを見て

心あるしわさなりけり何くれとうゝるなすひのなりもならずも

九日 賤か家の垣根に大角豆の花さけるを見て

山賤かふし柴垣にまつはりて大角豆花さく夕くれの空

十日 歴史の講せし時截髪膝圓のことをおも

ひつゝけて

きたへてし其の二ふりの太刀風に東男の子のそてやなひきし

十一日 富士見にゆきける時道のへの卯の花盛りな

りければ

袖寒き心地こそすれ卯の花の雪の上ふく夏のあさかせ

十二日 空久しくもりかちなりに晴れわたりし

夜の月を見て

つれくのなかめにあきし折しもあれはれてすゝしき夏のよの月

十三日 講せし時鳥の海のためかひを

鳥の海や雨とふりくるあたやをも物かはあたと君はうちけむ

十四日 遠方にて夕立しけるを

遠方のふもとの空をかきくらしけしきはかりに過くるゆふたち

十七日 詠 史

眠らすはいかゝなりけむ武夫か妹かりかよふよるのくるまそ

十八日 詠 史

夜をこめてものゝ音さゆる月かけにわかれもゆくかあしからの山

十九日 詠 史

いた矢くしおはせしあたはゆるさしとかへすいた矢もたかはさりけり

二十日 詠 史

このかみを心みかてらねらひいし鳴かふら矢の音のさやけさ

廿一日 詠 史

武夫かはかりしことはかひなくてあはれもろきはしらかはのみや

廿二日 時三郎と二人にて父君のみもとにて御病を



まもれるによるこひ給へるさまなり

はらからとつとひ守れば御病も忘るか如見えわたる哉

廿三日 けふは二人御暇してたちけり

又來むと契りていつる袂をはをしとはさすかのたまはぬかな

廿五日 小井川に教育に出ていきて眞志野にやとれり

諏訪のうみめぐりて見ればこゝかしこけしきにあかぬものにそありける

廿七日 父君の御病けふもなやみたまへり

めてませる庭の岩根に水うてとすゝしとたにもものたまはぬかな

廿八日 いやくなやみませり

侍る身になひもあへぬみなやみはすへなきことのかきりなりけり

廿九日 御病又一くさましぬ

御病を守らす神もなき世かとまとひあひてもねはなかれける

三十日 折しもあつさ日にけに増りぬれは

さらてたにくるしきものをいかなれは日にけに増るあつさなるらむ

卅一日 けふは少し忘りさまにや繪など見給ふを見

奉りて

しはしたに怠りませと祈りつる心をけふは神もうけ氣む

八月一日 うつらゝはかなけになり給ひぬれは

うちゑみて過ぎしきのふにひきかへて夢にもことをとはせさりけり

二日 午後四時に逢にはかなくなり給ひける後ま

とひかなしみつゝおもひつゝけゝる長歌短

歌

夏の日の暑きさかりは木深かるかけをゆかしみすゝしかる風をこひしみ世の人の同し心に  
天つ水あふくかことく明暮にあふき奉りしちゝのみの父の命は八十あまり七つのよハひた  
たみなす重ね給ひぬあらたまの年のさかりは大御代の官にめされ靈幸ふ神にもつかへ年高  
くたけ給ひては糸竹のあかぬしらへを言のはにさハにうち出て昔今の妙なる筆を書に繪に  
あまたつとへて庭の面に木草うゑなへ池水に清水をたゝへいろくつの游へる見つゝへたて  
なき友とちつとへ白黒の波うちよせてよのうさも忘るゝ如く年月を返しましゝを露霜の秋  
もこなたにはゝそはの母もまさねハいかさまに吹きぬる風かちゝのみの父の御はたにうれ  
たくもしみやはしつるしきたへの御床つきぬと玉つさの使のいへは子ら孫らはせつとひき  
て晝はも御足かきな夜ハも御手かきなてゝいねもえす眠りもあへす吾かいのるしるしは  
たえて夏の日のかゝやく空に浮雲の消えゆく如く玉の緒そたえたまひぬる立ち走り足すり



すれといはむすへせむすへをなみましゝ世のかたみにたにとめてましゝ物らつとへて御床へをうち守りつゝあつき日のかゝやくしらにまとひをるかもましゝ世におほし給ひし岩か根の松も露けくなりけるかな

三日 御なきからを假に御奥墓にをさめ奉りてよめ

る長歌

夢かも現かもちゝのみの父の命えかなしゝわれハかなしゝとこいはの此の岩とを動きなき御座にませとねなきつゝ定めまをして今日よりやなけかひをらむ明日よりやいきつきをらむえかなしゝわれはかなしゝ夢にうつゝに

四日 朝とく御墓まうてして

朝またきまうて來ぬれはおくつき草はは露にうちふしてけり

五日 今朝も御墓まうてして

今朝は又ふく風さむし土さくる夏の日かけのほひそむれと

六日 時三郎傳とゝもに一度かへりたゝむとす

かくはかり袖をつらねてまかるともしろしめさねはせむすへもなし

七日 たゝうつらゝとして過しぬ

何事をするとはなしにうちふしてはかなき夢をいく結ひしつ

八日 雨ふりければ

けふは又ほしゝわつらひぬわひ人のたもにかゝる夏のむらさめ

九日 人々にとふらはれて

つれゝとけふもくれけりとふ人のことのはくさをなくさめにして

十日 父君の今はの御をしへをおもひて

いつまでも忘れぬものはちゝのみの父の今はのをしへなりけり

十一日 けふも物書かむとす

心やるすへにもかなと墨すりてそむる筆さへとゝこほりつゝ

十二日 雨猶やまねは

うちしめる夏の衣の袖の上に雨も心もはれぬころかな

十四日 滿韓紀行の淨書をへてつゝりなとせり

かきをへてくりかへし見る文の上にからもろこしを思ひやるかな

十五日 夕立せり

夕立のあしとく過くる山のはにかくれもあへぬ夕つく日かな

十六日 妻の一年祭に

百草の花の色香はかはらねと去年見し人のやとそあれたる



十七日 家に朝のまともあり五十首詠をしたり

年をへてたとれとつきすいかはかり廣き奥あることのはの道

十八日 書を風にあてたり

一つたにけふはゆるさし書はめるしみおふ風よやますふかなむ

十九日 ある人にこはれて武士道はかきに贅すとて

兒島高德のうたに

櫻木にやまと心を匂はせてしるきは君かまことなりけり

二十日 同時小楠公のかたに

なき數に入ると定めて後にこそ梓の弓は世にひきけれ

廿一日 父君の廿日祭にあたり

夢の間に廿日經にけりみをしへの御聲は耳に猶のこれとも

廿二日 平岡下にて葛の花のいとるはしきを見て

うらかへす葛の葉分けに紫の色にほはせて夕風のふく

廿三日 木村重成のかたに

たゝにやはかへりたゝしと使せし君か心のをゝしくもあるか

廿四日 本多忠勝のかたに

かへりゆくはたの追風乃とけしと水かふ駒もかつはしりけむ

廿五日 輻重兵のかたに

おひもてる重荷なりけり國の爲はこふ車のかてもまくさも

廿六日 平岡下の葛の花のさかりに

はふ葛の花のさかりとふく風のうら紫にかへすとそ見る

廿七日 神代の里わたりにて稻の穂の出でたるを見て

ゆたかなるおきつみとしは穂に出てゝ神代の里に秋風そふく

廿八日 日本文學史をよみて

いにしへのことはくさのめてたさにまきかへせともあかぬ文かな

廿九日 夜ねふられざるをりに

さよふけて雨よふ軒の枝蛙なくねさひしき草の庵かな

三十日 日本文學史を見て

くりかへし見れとあかぬといにしへのことはの花の色香なりけり

九月一日 渡邊關の二人を分水莊に訪らひて

百草の花すり衣にほはせてわれはきにけり君に見えむと

三日 油屋にて四季の歌を其の所によりてよみて